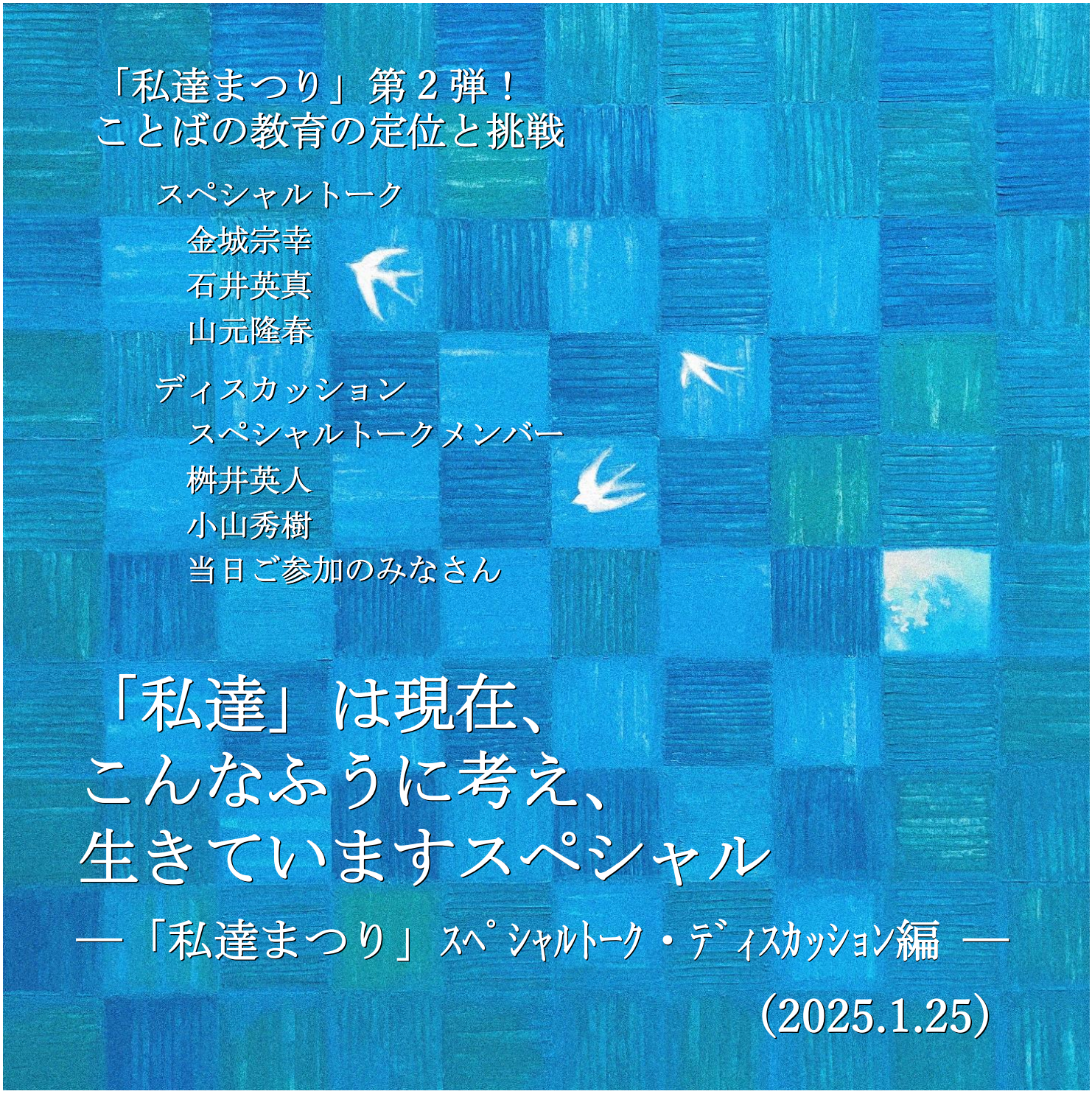

＜画　川口麻里亜（総合学科 16 期）＞

Ⅲ

学校設定科目「私達が立っている場所」開講 25 周年記念

「私達まつり」第 2 弾　スペシャルトーク・ディスカッション

ごあいさつ

「私達が立っている場所」25 周年記念事業「私達まつり」もいよいよ今日、第 2 弾の日を迎えました。この授業を立ち上げて 25 年になるので、区切りと展望を持ちたいと考えはじめたのは 2023 年 9 月のことです。これまでの受講生の発表資料をもとに、卒業生の声も入れて文章としてまとめようと最初は考えました。ところが、その作業はなかなか進みません。進まないのは、その構想に私自身が違和感を感じているからだということに気づきました。しかし、どうしていいか見当がつきません。卒業生に聞くところから始めようと、「私達まつり実行委員会」をつくり、卒業生に声をかけようと思いました。そう考えても、私の違和感は、消えず、誰にも声をかけることができませんでした。。

そんなときに読んだのが「大阪の生活史」（岸政彦編　筑摩書房）です。そこには、圧倒的な分量の人々の生活の記述がありました。私は、「私達が立っている場所」を受講したひとりひとりのことばを聞きたいと強く思いました。そして、それをまたみんなと共有したいと思いました。そこまでたどりつくと、私の違和感はだんだんと薄くなりはじめました。ちょうどその頃「私達まつり」という着想を得ました。（「私達まつり」第 1 弾研究協議での杉本舞教授のことばに従うと、私はもやもやとしたものをことばにしたことになるのでしょうか。）

筑摩書房の関信彦さん、東勧さんと会い、「大阪の生活史」についてお聞きしました。受講生の森木乃美さん、坂井田暖さん、藤本藍里さんに声をかけ、「私達まつり実行委員会」ができました。約 800 名の卒業生に便りを送り、その声をもらいました。今宮高校の先生方に助けていただき、ひとつひとつが進んでいったように思います。「私達まつり」を 11 月と 1 月の 2 回開催にしようと考えたのは 2024 年 3 月頃です。第 1 弾は受講した卒業生による授業がよいと提案してくれたのは、桝井英人先生と山元隆春先生です。金城宗幸さんは、以前からこの授業の学びを文章にしてくれていました。この授業の本質を鋭く見抜かれた石井英真先生は、そのご著書でことばをいただきました。

みなさんのお手元に、「私達まつり」第 1 弾の記録をお届けしています。第 1 弾の成果や一昨年から今日の「私達まつり」第 2 弾開催までの経過は、私がみなさんにたどらせていただいた、そうでしかあり得なかった軌跡です。「私達まつり」もまた、「私」が「私達」になり、「私達」のなかに「私」を発見することに違いなかったと今、強く思います。それは必然として未来を展望することばを生みます。「ことばの教育の定位と挑戦」というテーマをあたためながら、金城宗幸さん、石井英真先生、山元隆春先生のスペシャルトークを聞きたいと思います。つづくディスカッションを通じて、本日ご参会いただいたみなさんと深くその学びと展望を共有し、確かめあい、更新されつづける「私達」として次の世代に資したいと思います。

小山秀樹

目次

ごあいさつ

ことばの教育の定位と挑戦

1　スペシャルトーク

金城 宗幸 ―― 6

石井 英真 ―― 10

山元 隆春 ―― 15

2　ディスカッション ―― 22

3　「私達まつり」第２弾 参加者のことば

3-①　スペシャルトークについて ―― 32

1. 金城さんのお話は、日頃聞けない話ばかりでとても面白かったです。面白がる、というワードは
2. 石井先生のお話の中で、negative capability を生徒に持たせられるかという点について改めて考え
3. 不快感、モヤモヤをいかに引きずらせるかが探究へと繋がってくる、という石井先生のお話が特に印
4. 小山先生の実践について、授業を受けた卒業生である金城さんからの実感のこもった言葉、それを理
5. 読むことについては、本質を捉える手段であり、かつ自己の中で解釈を確立することであるという課
6. 3 人の方のお話を聞いて、「ことばの力」をつけるということの意味を考え直す機会になりました。
7. 大変貴重で、学びがあり、有意義な時間でした。
8. お三方のトークそのものが素晴らしい作品であると感じました。そこから、私は個人的に、勝手に、
9. 金城さんの「勝手に思う」「おもしろがる」ことという言葉がささりました。原作者として勝負され
10. 日頃、本を読む事もなく、学生の頃も深く読むという体験もしてなかったですが、ちゃんと時間を
11. 三名の話を聞き、とても勉強になりました。特に印象に残っているのが、生徒が真の学びができて
12. 印象に残った言葉「快・不快は表裏一体」「勝手に思う自分を保つ」「空き地がなくなった」「その先
13. 遅刻してすみません。お話をほとんどお聞きできていません。1 部の終わりにまとめをしてくださ
14. お三方がそれぞれの特徴・ジャンルを活かしたお話をしてくださり、勉強になりました。（教職員）
15. 金城さんの率直な言評、石井先生の実感のこもった教育論、山元先生の物静かな読書論（集って本
16. 金城さんを初めとする御三方の貴重なお話を聞くことができました。
17. 参加できてよかったです。石井先生の、問から答えの距離が長いのが良いというお話が興味深かっ
18. 金城氏の、「おもしろい」を、「快・不快（本能的側面）」と「興味深い（知性的側面）」に分けて考
19. 漫画家の方の創作に関するエピソードや世界の見方、価値観の一端を知ることができ、非常に面白
20. 3 名ともともて面白く、興味深くお話を聞かせていただきました。金城さんがおっしゃっていた
21. 登壇の先生方のお話を聞いて、私なりに「私達の立っている場所」の教育の意味を考えることがで
22. まず、トークをされた先生方の人選が大正解だったと思います。金城さんの「勝手に思い、おもし
23. お三方の異なる視点からのお話面白かったです。

24. 不快という感情にネガティブなイメージしかありませんでしたが、人間の本能に働きかける大切な
25. スペシャルトークをされた方の人選がよかったと思います。それぞれ異なる立場、異なる視点から
26. 御三方それぞれのお話が、自分の今後の生き方の軸の一つになるようなものでした。貴重なお時間
27. 卒業生です。私が受けた授業の答え合わせや伏線回収をしているようで楽しかったです。
28. ○金城先生から、漫画を描く際に、論理以前に動物としての快・不快が面白さの土台として存在し
29. 私の理解力がもっとあればいい！そんな風に悔しく思うほどこの講義がいかに面白くタメになるも
30. 金城さんの話はおもしろかった。まず不快を呈示しないと読んでくれないと言う指摘はヒット作と
31. 石井先生のお話の中での「他者との関りは基本不快」というお話が印象的でした。
32. インプットだけでなくアウトプットも重要であると再確認した。語ること、対話すること、異分野
33. むずかしいところもありましたが、とても興味深いためになるお話でした。特に石井先生のお話は
34. ３名の方の話を聞きながら、自分が好きであった国語・読書と、現場で求められる国語力（能力）
35. 同じ卒業生(私は 10 期生)として金城さんの話には共感と懐かしさで気持ちがわくわくし、喜んでし

3-②　ディスカッションについて ―――――――――――――――――――――――――――――――― 38

1.　先生方の質問も勉強になりましたが、高校生の質問には、漫然と授業していてはいけない、と思わ
2. パネラーの先生方のそれぞれの想いがディスカッションで表現されてて、普段の授業に活かしていき
3. 古典を読解する上で、必要な最低限の知識を身につけてもらうために、どうしても「受験古典」の授
4. テクストを何度も読み返し、言葉に徹底的にこだわり、思考する取組み。併せて、他者とも議論を尽
5. 「飛躍」の話題と「詩を学ぶ意味」の話を興味深く聞きました。それから、最後の若い質問者が投げ
6. 学校で教えることまたは学校で学ぶことの意義を捉える貴重な経験となった。中盤で生徒に面白がら
7. あと 1 時間は議論を聞きたいところでした。桝井先生や小山先生にももっとたくさん話してもらいた
8. ディスカッションでの質問への小山先生のご回答は、私の中ではある意味「答え合わせ」でした。高
9. 「知っていることを確認する」読みと「知らないことを発見する」読みは非連続で、そこには飛躍が
10. このイベントを参加されている皆さんご自身の教育に活かそうとしている感じがよくわかりまし
11. 明日も行きたいと思える学校はどのような学校なのか、これからも考え続ける必要があると思いま
12. 印象に残った言葉「本気で反応しているか」「フッとわいた疑問を言える雰囲気づくり」「種が残る
13. こんな流れでよいのかな？と、確認なさっていましたが、知りたい内容ばかりでした。日本は、学
14. 上記と重なりますが、お三方が自分の分野に引きつけて回答してくださり、面白かったです。私の
15. 先生方の意見を聞いて勉強になりました。国語教育っていいなぁと思う反面、私は英語教師なので
16. フロアからの質問に対して、登壇者の皆様のコメントがユニークでしたし、それをコーディネート
17. ディスカッションでは、現役の先生や高校生の方の悩みや疑問を聞くことができました。
18. フロアの様々な意見に真摯に向き合ってくださっていて、たいへん勉強になりました。最後の現役
19. 出席できなくて残念でした。(他県高校教職員)
20. 最後の高校生の方の意見が素晴らしかったです。真っ直ぐに自身の意見を話される姿勢、大嫌いな
21. 現在、私も小さな学校で教員をしているのですが、参加者の方の多くが教員の方で、授業や国語教
22. 会場から、なぜ学習者が関心を持って進んで考え抜こうとする授業になったのか、といった質問が
23. 桜和高校の学生さんによる生の言葉とそれを受けた金城さんのご発言が、今回のディスカッション
24. 時間的に難しいかもしれないが、もう少し質問者とのラリーがあれば良かったな感じたのが正直な

25. 自他を比べるのが容易な時代になりました。よくも悪くも、それにより、生きづらさをを感じる
26. スペシャルトークでそれぞれの方の立場やお考え（お人柄も）が分かった上でのディスカッション
27. ハイレベルすぎてついていくのがやっとでしたが、実際に教育の現場に携わっておられる方や、現
28. 確かに今は作文よりもポエムの方が書きやすいかもしれないと思った。また、高校の勉強は共通テ
29. 小山先生は厳しいかという質問に答えた者です。
30. 最後の高校生の質問(入試ありきの授業にならないためには。)は、教員として常に自問自答すべき
31. 興味深い話を聞けて最初から最後まで楽しかったです。特に私が高校三年間で感じた率直な意見や
32. 普段いかに質問と答えの距離を近づけて考えていたかよく分かった。このディスカッションにおい
33. 先生方のご意見を伺えてとても勉強になりました。久しぶりに頭をしっかり使ったように思いま
34. 必要なのは「時間」と「教師側の読みの能力」かと感じます。まずこの授業、方向を取るためには
35. 頭の中に形のあやふやな言葉や想いが巡り自分の身体が高揚してました。当時の授業の時と同じ感

3-③　ご意見ご感想(現役の高校生へのエールなどどんなことでも) ―――――――――――――― 44

1. 今日はありがとうございました(教職員)
2. 小山先生の授業や私達まつりを通じて、言葉の持つ力の重大さを感じました。英語で同じ言語を教え
3. 学校設定科目を採用している高校で勤務していますが、これほどの熱量をもって行えるほど自分自身
4. このような素敵な授業を選択できる皆さんのことを羨ましく思います。
5. 世界をことばでつかみ、そのことばで人と繋がる。それができれば私達はどこにでも行ける！　高校
6. 「私達の立っている場所」では個人によってその課題は異なりますが、自分を追求するという意味で
7. いわゆる「困難校」で授業実践を行った報告は、あまり見つからず、他の学校の先生はどのように授
8. 本日最後に高 3 の生徒が発言した言葉がすごく印象に残っています。
9. 今回の第二弾は、前回と違って気楽に参加させていただきました(笑)。
10. この授業は、これからの人生の糧となる何時間かだと思います。ぜひ「とっくみあい」を楽しんで
11. 貴重なお話を聞く機会をいただき、ありがとうございました。(本校保護者)
12. 小山先生が作り上げてこられた「私達が立っている場所」を中心に集まった方々の教育に対する想
13. 「指導できる幅を広げる」ことができるよう、「視点」を変えてみます。(教職員)
14. 選択と決断は、えらぶ、ということであるが、その後ろに控える覚悟が違うのだ。自分で、えら
15. 最後の質問者で、オウワ高校の 3 年生さんがおっしゃっていた言葉にハッとさせられました。「共通
16. 大勢の熱気でわいた私達まつりに参加し、小山先生、そして大阪の先生方のエネルギーを分けてい
17. 文章を読み考えたことを自分の言葉にするという行為は、勇気のいるものだと思います。ですが、
18. 実は、授業している方も授業でたくさん学びを得ているんだよ、高校生のみなさんと同じ方向を向
19. おもしろい人を育てる学校、おもしろい人を育てる授業に、これからもおもしろがって参加してく
20. 附属に着任した年に小山先生の授業を拝見させていただき、いきいきと活動する学生さんの姿に感
21. とても個人的な感想ですが、十数年ぶりに母校の門をくぐり、何一つ変わっていない校内を歩い
22. 現役の高校生へのエール
23. 聖光学院の先生が問いかけられた、答えを求めがちな理系の生徒が多い進学校で、詩をどう扱えば
24. ネットや AI が溢れて大変な時代だから、本質に向き合うのはとても大変だろうなと思います。
25. 非連続的に続けるという表現が面白いですね。

26. 生徒の心にトゲを残すこと。学びが「非連続」であること。すなわち、教えたことがそのまま何か
27. 「私達」の授業を受けている生徒にも、そうでない生徒にも、言葉を使って社会を生き抜く力が少
28. 日常に溢れる様々な疑問や興味を大切にして欲しいと思う。
29. 来校しての感想(感じたこと)
30. 感想の送信が遅くなり、大変申し訳ございません。真正の学びという言葉が一つ、キーワードだっ
31. 小山先生、２６年も「私達が立っている場所」を続けられて、ご苦労さまです。１度授業見学に伺
32. 現今宮高校２年生の保護者です。カリキュラムの多さ、独自の授業があることで、娘は今宮高校を
33. 非連続性との出会いを大切に。何げない瞬間にこそ、新たな発見　成長はある。(一般)
34. 息子（現高３）がなぜこの授業を取らなかったのか…残念です。高校生の今、考えて、意見を言
35. 母校での私達まつりに参加できて良かったです。知的な空間で帰宅後少し目眩すら感じました。
36. 「私達まつり」の、「ことばの教育の定位と挑戦」のテーマから逸れるようで、アンケートに答え

4 「私達まつり」が開催されました　校長ブログ(2024.11.15) 中須賀久尚 ―――――――― 51
「私達まつり」第２弾が開催されました　校長ブログ(2025.1.25) 中須賀久尚 ―――――― 54

5 ＜実践報告＞国語教室の本質――「私達が立っている場所」を参考に
関西大学非常勤講師　桝井英人 ―― 57

6 関連資料・関連項目リンク(QR コード・URL) ―――――――――――――――――――― 69

ことばの教育の定位と挑戦
1 スペシャルトーク

日時　　令和７年１月 25 日（土）13：00～17：00
場所　　大阪府立今宮高等学校　２Ｆ多目的ホール

◆小山
皆さん、こんにちは。本日は「私達まつり」第２弾にご来校いただき、本当にありがとうございます。
「私達まつり」は大阪府立今宮高等学校と大阪府高等学校研究会との主催で、学校設定科目「私達が立っている場所」の開講２５周年の事業として、広くその学びを共有しようという企画です。昨年の 11 月 15 日(金)に第 1 弾が行われ、卒業生による授業と研究協議を実施しました。
本日の「私達まつり」第２弾は、「ことばの教育の定位と挑戦」をテーマに、ご高名な 3 名の方のスペシャルトーク、そのあと、会場の皆さんも交えたディスカッションになっています。
約 120 名のお申し込みの内訳は教職員 56%、一般の方 20%、本校卒業生 17%、本校保護者 7%の割合です。

金城 宗幸（かねしろ むねゆき）
プロフィール
今宮総合学科 8 期生。『ブルーロック』、『僕たちがやりました』、『神様の言うとおり』など、多くのファンを持つ漫画原作者。第二次世界大戦の沖縄戦についても語り継ぐということを言及。今宮高校 100 周年記念誌で「私達が立っている場所」の授業に触れている。

◆金城:
こんにちは。金城宗幸といいます。漫画原作とはなんぞやっていうことから、話をさせてもらったらと思います。

【漫画原作という仕事】
漫画原作は、アイディアを原作者が出して漫画家さんに渡して、編集さんと打合せをして、形にして世に出していくという順番です。僕は原作者で、アイディアを出して、ネームという形でコマ割りして、セリフ書いて、キャラクターと名前を考えて、映画でいうと、脚本・演出ぐらいまでやって、あと漫画家さんに渡して、監督と演者をやってくれる感じです。
元々、漫画家になりたかったんです。総合学科なので選択授業なんですよ。漫画家になると思っていたので、受験のことを考えずに、好きな美術と体育と国語で 3 分の 2 ぐらい授業とっていました。在学中は勉強してなくて、いつかは勉強するんだろうと思っていたけど、楽しかったんで、あんまりやってなくて、大学行ったらみんな絵がうまくて、どうしようってなって。一応、漫画が描けたから投稿したら、一番小さい、担当さんが付いてくれるところに引っかかったけれ

ど、絵がうまくならなかったので、1 回辞めて、芸人やると東京に行って。いろいろ僕なりに夢破れ、現実を見、を一応経た上で、たまたま東京で声をかけてくれる漫画編集の方がいて、絵は下手だけど、お話は考えられるから原作者をやってみないかと言ってくれて。そこで僕はもう夢とかでなく飯食おうと思って、はい、やりますとやり始めたのが始まりです。

【「私達が立っている場所」の授業とのつながり】

「私達が立っている場所」の授業が当時どうだったかというのを話した方がいいのかな。さっき言った通り、好きな体育と美術と国語しか取ってなくて、普通に「現代文」とかある中に、「私達が立っている場所」ってあったら、そら取るやろって取りましたという感じです。行ってみたら、小山先生で、いやもう変な人で、なんか動物のネクタイつけてポケットパンパンという人。

授業の内容は何か一冊、本を読んで、まず自分で思うことを話して、チームになってディスカッションして、こういうことかなと話し合う。小山先生が最初に、「本質、本質ですけど、それは」とか、「本質ではないです」とか、「本質」ってめちゃくちゃ言うんですよ。本質とか、何か新しい観点みたいなことをテーマとして言ってくれていた。本質って何やろ、作者の意図とか、一冊の本に対して意見を出し合い、そのあと、みんなでこういう見解だという話をチームに分かれてやるという授業でした。

多分その当時、小山先生も意識していたと思うんですけど、作者の意図はこうじゃないかという一応の答えを設けてはいたけれど、それぞれがどう思うという、最初の段階を引き上げていたと思います。一応の答えとして、作者はこう思っているんじゃないかとか、自分は本質はこう思うというのは言ってくれるんですけど、何か答えがあるものを探しているわけではなくて、それぞれの観点とかそれぞれの考えている日々の言葉とか、そういうことを言ってくれていたなと思います。

なんか面白がってくれていたな。僕個人ではなく、それぞれの生徒を面白がってくれているなというのが印象です。答えがあるものではないものを授業にしていきましょうって感じ。答えがないってやつが僕は好きだったので、そこを含め、今も覚えている。授業の内容というか、小山先生を覚えています。こういう人がいたんだっていうことが一番大きいですね。こういう人、何を言っても同じ目線で喋ってくれる大人がいる、先生がいると。だから今日も覚えているというところです。

今の原作者の仕事をやっていく上で、その授業のやったこととつながっている部分も結構あると思っています。最初にアイディアを自分で出して、それをみんなでディスカッションして、最後にプレゼンしつつ形にする。

最初に思うアイディアというのは、「私達が立っている場所」の時もそうだったんですが、勝手に自分が思っていることがすごい大事なことやなと思っています。物語を作るときも、最初からこんなもん作りましょうとやるのではなく、勝手に思うという、その自分を保つのは結構むずかしいと思っています。Amazon とかで調べたらおすすめが出てきて、あれは選んでいる感じだけれど、実は選択肢を出されている。自分で勝手に思っているのではないかと思わせられている感じです。純粋に頑張って、そういうシステムや社会性から逸脱して、勝手に自分で思うところに物語を作る最初は立ち返るようにしています。

例えば、僕はサッカー漫画とか描いているけれど、日本代表ってストライカーがおったらいいのにとか、子供みたいなことから始めたりしています。最初にどうやったら売れるかというより、何かそういうのを大事にしているのが、今となっては大事だったのかなと思っています。自分で勝手に思うという、その最初の段階を経て思考していることが、「私達が立っている場所」とリンクしているかな。本を読むときに僕はこう思う、というのをまず引き出してくれて、みんな聞く態勢に小山先生が作ってくれていた。みんなも僕はこう思う、私はこう思うと言っていいんだよという空気がとても大事なことだったな。だから、仕事でも僕がこう思うと話しするんですが、編集さんがこう思うとか、漫画家さんがこう思うというのをちゃんと受け止める、聞くという感じを大事にしているのは、何かつながっているのかなと思っています。

【「勝手に自分で思う」と「面白がる人」】

第一段階で自分は勝手に思う、その次にそれを面白がるという人が必要だと思っています。さっきの「私達」もですが、ディスカッションで面白がるという時間が、結構大事で、「面白いと思う」ではなくて、「面白がる」って難しいというか、大変な作業だと。「面白がる」というのが僕の今年のテーマなんです。面白いことって、僕は世の中にそんなにないと思っているので、だから面白がっていく人が多分ちゃんと獲得していくかなと思うのと、勝手に何かをする人を面白がるということが、多分、次の段階で何かが起こっていく。見つける人、面白がってくれる人や、面白がる人に自分がなるでもいいし、誰か面白がってくれる人を見つける、そこ結構すごく大事なことだと思っています。

仕事でいうと、最終的に形にするところ、一個みんなで叩き上げていくところは「私達が立っている場所」とリンクするな。漫画家さんが絵を描いてくれるんですが、絵を描くことにその人生をかけている人と組んだら、僕は絵を勉強してきていなかったので、漫画家さんが描く絵に対してのリスペクトがあるんです。それを多分、僕の中では勝手に自分でこれがいい絵だとやっている人を面白がれている部分があるのかな。

いろんな形があって、原作の言う通りに描けというタイプの作家さんもいらっしゃるし、原作の言う通りに漫画家さんが描くべきだと思っている編集さんもいらっしゃる。それでうまくいっている表現も中にあるんです。ただ、僕は１人ではできない体験を作った方が、原作という仕事をやっている意味があると思うので、何か勝手に僕が思う、面白がる、形にするという順番でいくと、届いていく、何かが起こるのはそういうことかな。それが本当に「私達が立っている場所」でやっていたこととあまり変わらないと思っています。

【まず、快・不快から入る】

さっき「面白がる」というフレーズを出したんですが、「面白い」って結構、言葉の意味が多いと僕は思っています。面白ければ売れるみたいな感じで漫画やっていると、面白かったら絶対売れるとか言っているけれど、いや面白くても売れてへんやつあるよなとか思って。いろいろ自分なりに分析して、「面白い」の中に日本語が足りていないと思っている。面白いって、主観じゃないですか。完全に主観で面白いって感じると思うんです。

「面白い」には僕は、快か不快かという動物的なものと、興味深いというインタレスティング

な人間が知性で感じるものがあると思っています。快か不快かの方は、本当に本能的なものであって、知性の部分で多分興味深いっていうのがあるんですが、読者に届くという意味で考えると、先に快か不快かをまず提示しないと、人は見ないですよね。僕も今、何個か作品出していて、ありがたいことに何個か当たっているんですが、すべってもう打ち切りとかもいっぱいある。何が違ったんだろうって思うと、最初にこの快か不快かというのを提示しているかどうかです。これはエンタメの話ですが、最初からロジックだけでいくと、どんだけ面白くても多分見向きもされない。だから最初に快か不快かをやったら気になるから、気になった人に向けて、ちゃんとしたことを言ったら聞いてくれる。

人の心理として何か学習しようということや、人が何かに興味持つって、やっぱり快か不快が先にある。僕は多分、小山先生を変なのって思ったのは割とでかいんだなと思っています。人としてこの人なんだろうって気になったから、この人の言うことがどういう意図なのかが結構大事で、そこをなしに人が学習することってあり得るのかな。人の心をキャッチするというのは先、動物やろって思っています。漫画でいうと最初に不快でもいいんだと。快・不快って表裏一体だと思っているので。大人になってくると、頭でちゃんと考えることをした方がいいのかなと思って、どんどん知識と情報とロジックだけ増えていくんですけど、何か本能的に、いや、快か不快かのセンサーを育てないと多分、割合わんぞっていう感じが、個人的にはすごくしています。

【「気持ち悪い」の感じを「面白がる」】

話を戻すと、最初に自分が勝手に何か思うことに関して、世の中の評価とか一回置いてといて、純粋に快か不快かのセンサーをはずした上で、自分って何を思うんだろうと捉えることが、僕は大事だと思っています。そこからしか何も始まらないんじゃないかなと強烈に思っていたところ、今回のこの話があって、確かに「私達が立っている場所」でやっていたのが「私達」とのつながりかなと思っています。

多分皆さんも生きていると自分勝手なだけにはいかないので、それを自分勝手に生きている人というか、勝手に言ってるな、勝手に私も言ってるからというこの状態ってすごい信頼関係が実はあると思っています。この人は私のために言ってくれているのかなとか、私はこの人のために言ってるのになとかが入ると、これ多分、勝手に思うってことになってないと僕は思っていて。そういうターンもあるし、そういう場面も大事なところもあるんですが、この周りを見て言うというより、僕はキモさと呼んでいるんですが、自分が思うということのキモさ、みんな気持ち悪いって思えばいいんじゃないか、みんな気持ち悪いって思ったほうが結構生きやすくないか、と思っているんです。

正しいものとか、自分が綺麗なものだと思うと、さっきの人を面白がるということができないから、自分もキモイし、自分も勝手に思っているだけやし、自分が勝手にお前のことを面白いと思っているというこの感じが、多分、信頼関係にもなるし、ディスカッションするときに境界が変にならなくて済む。漫画家さんと打ち合わせするとき、漫画家さん自体は自分の表現を突き詰める人で、言葉にすることよりは定例表現することがとても上手な人が多くて、その人らと話すと僕の方が喋るのが多い。でも僕がその人を面白がらないと何も出てこないから、「私達」の授業で結構学ばしてもらっているなというところです。その上で、1 人でできないことがどんどん積

み重なっていって、今、飯食えてるし仕事として成り立っているんだろうなと思っています。

勝手に生きるっていう力が、僕は今後フォーカスされていくんじゃないかと思っています。さっき言った Amazon とかネトフリとか、便利さがどんどんみんなの価値観を統一していくような気がするんです。それで、こういうものがいいものだと思わされる。それも楽やから全然いいんです、僕もそれを享受しているんで。それでもどこかで自分はこう思うのになとかが出てきて、それを言ってはいけないとか、言わなくていいとかいっぱいあるんですが、勝手にそれを思うということをやめないでほしいと思っています。100 パー何かの影響を受けないのは無理ですけど、誰かに用意されたようなことではなくて、これ勝手に自分で思っている、自分が感じているし、自分が頭で考えたという、勝手に生きる力みたいなものが多分、今後、僕は結構必要になってくると思います。今、外国の人もいっぱい増えていますし、いろんな人と交流することが増えて、絶対、自分で選ばないといけなくなるので、自分で選んでいると思っているけれど選んでない感じにならない人、ちゃんと選んでいる人が多分、おもろいんじゃないかな。そういう人生を僕は見ていきたいなというのと、皆さんも勝手に思って勝手に面白がって生きていってもらえると、僕も勝手に生きていこうかなと思っています。

みな基本、気持ち悪いという感じが僕の中のテーマにあったので、それをお伝えできれば今日はいいかなと思っておりました。ありがとうございます。

石井 英真（いしい てるまさ）

プロフィール

京都大学准教授、教育方法学学力論を専攻。学校現場への助言や連携など活発に活動。多数の著書、また学習指導要領への関わりなどで活躍中。『高等学校　真正（ほんもの）の学び、授業の深み―授業の匠たちが提案するこれからの授業』学事出版。2022 年 8 月で、「私達が立っている場所」の授業について取り上げる。

◆石井

紹介いただきました京都大学の石井です。よろしくお願いします。

【いい学校ってどんな学校？】

私の専門は教育方法学で、何のために何を教え学ぶか、そしてどう評価するのか、といった教育の中身について研究しています。その中で、一言で言うと地味にいい学校を作りたいと思っているわけです。いい学校ってどんな学校だと思いますか。学力の高い学校というのは案外出てこない。明日行きたいと思える学校、シンプルにそういうのが出てくる。昔は子供が明日行きたいと思う学校、最近は先生が明日行きたいと思える学校。夏休みで、管理職向けでやったら、管理職も明日行きたいと思える学校。それぐらいみんな明日行きたいと思えないということです。そうしたら、どんな学校だったら明日行きたいと思いますか。自分も明日行きたいというのはどういうことかというところから、具体的にイメージできてきます。もう一つ、子供の姿で勝負できるかどうか。いろんな取り組みやっているけれども、それで子供育っています？先生育っていますか。

もう一つ、最近気づきました、語りたいものが生まれる学校。語るとはどういうことか。さっきの金城さんの話と繋がるけれど、語るというのは自分しか語れない。だから最近は、話し合いや発信はあるけれど語りはない。心が動いたら語るんです。語りたいものがあるということは、心が動く学校ということです。同じように、先生方に、この学校なにか語りたいことがあったら語ってくださいって言って、そこでわあわあ出てくるようなところはいい学校です。

さらに一つ僕の指標にすることがあるんです。いい学校かどうか、卒業生を見ます。卒業生を見て、おもろい人がいたら、いい学校。その学校から、その先生の元からおもろい人が出ているということはそこに何かあるわけです。おもろい人を育てている学校、そういう先生はすごい先生だと私は思うわけです。

そこで話を戻して言えば、小山先生すごい先生だと思いました。このおもろい人というのは結局、変な人が育てることが多いんです。

実は最近、世の中なぜ生きづらいのかと本気で思っています。先ほどの金城さんのお話で共感するところがあって、やっぱり変な人は、なにか残すところがあってですね。だから、学校にもっと、変な人が増えてくるといいと私は思っているわけです。

今日お配りしている資料の最後に書いています。「変化の激しい時代に大事にしたいこと」に「快適な生活、快適な学びに向かいがちなスマート社会においてこそ、ノイズや割り切れなさと出会い、既存の視野や価値観の外部と向き合う」、一言で言うと「痛みや不快さも伴った学びが重要」です。

臭いとか、他人と関わるって、基本、不快なんです。基本的に人は絶対他者ですから、気持ち悪い存在です。だからその気持ち悪さに向き合うということが重要だし、最近は不快な感じをもっと大事にした方がいいと思っています。自分と肌が合わないとか、匂いが合わないから関わらないけれど、匂いが違う人とこそ絶対関わった方がいいです。そうしたら確実に出会いが広がります。これが対話するとか共生するということです。それぞれが違うものだということに気づく。隣の人は絶対違いますから、絶対わかりあえませんから、まずそこから始まる。そのときに自分こう思うんやけどなってボソッと言ったときに、なんかキャラと違うとかではなくて、おもろいなと言い合える関係だったら、ずいぶんと教室も学校も社会もよくなるわけです。これが共生の関係。自分出しておもろいな、私はこう思う、おもろいな、この感覚です。そういったところが一番、重要です。

【【優れた教育者はトゲを残す】

この不快なこと、わからなさを引きずるというのは、最近、専門用語があります。「ネガティブ・ケイパビリティ」。ネガティブな感情を引きずれることが、強靭さに繋がります、柔軟さに繋がりますって話。ちょうど、そういった不快さとか、勝手するとかを、金城さんがさっきおっしゃっていました。

応用の利く学びとは、問いと答えの間が長いかどうかです。問いと答えの間が最近短すぎはしませんか。これ、不快感に耐えられますか。さらに言うと共生、インクルーシブとか多様性尊重するというのは、結局、不快な人をおもろいと思えるかどうかです。だからもうこれで、今の教

育課題全てが解ける。そういうことを、今日、金城さんのお話を伺いながら感じたところです。

優れた教育者というのはトゲ残すんですよ。こういう人と出会うといいですね。ちょっとしたトゲ残すのが大事。抜けへんの気持ち悪いことを引きずるから、結局そこになんかモヤモヤを育てる。

そのトゲの一つみたいな形で、この「私達が立っている場所」、その授業の話になってくるわけです。

【「真正の学び」とは】

私が小山先生と出会ったのは、この『高等学校　真正（ほんもの）の学び、授業の深み』の本です。「真正」と書いて「ほんもの」、これ英語で言うとオーセンティック、真正のとか本物、そんな意味です。本物・偽物の本物。その本物の学びという観点で、最近、軽い授業多いから、高校の深い授業の匠たちの骨のある、哲学のある授業を残したいと思って、先生をいろいろ紹介してもらって、五教科と総合について事例をまとめたんです。実は小山先生とは直接面識はなかったんです。でも、僕は大阪府の教育センターと長い付き合いがありまして、そこの高校の先生方と話をしておりますと、国語の授業でこの先生はどうですかって聞いたら、まず小山先生の名前が上がってくる。それで実際どんな実践されていますかといろいろ資料を見て、これはおもろいわと思ったし、何より今回のこの資料が上がってきたときに間違いなかったと思いました。

最初の、この生徒の顧問の先生とのやり取り。生徒が顧問の先生に、なんか言いたいことある、でも逆らったと思われたくないということを、意見だったら言えるんじゃないかと言って、それでもうまいこと言えなくて、最後は、生徒はその瞬間、顔を真っ赤にして顧問にこう言った。「これは文句と違う、これは意見や」。逆にそう言って切れるしかなかった。ちゃんと意見を意見としてことばにすることができなかった。小山先生そこに反省されるわけです。これこそがことばの力の原点、ことばの教育の原点と思います。ことばを学ぶってどういうことか、からこの実践が始まってきた、というこのエピソードを見て、自分が考えるこの真正の学びとドンピシャで重なると思ったわけです。

真正の学びとは、結局、学校で学んだことが活きて働いていないんじゃないですかという問題が出てきます。

具体的に言うと、バスケットでドリブルやシュートが上手だからといって、試合でうまくプレーできるとは限りませんよね。実際に試合でうまくできるかどうかは、状況判断ができるかどうかということです。だから、個別の技能を使いこなして、実際に試合でプレーできる力を育てていこうと思ったら、ドリブルやシュートだけやっていたら駄目で、実際に試合しないと育たないやないですか。その試合に当たるものを全くやらずして教科の授業をする結果、生きて働かない学力になっているのと違いますかというのが、元々この真正の学びの原点です。だから学校の外側とか将来の生活で遭遇するほんもの、そこをもっと経験させていった方がいいのではないですか。

例えば、社会科で言うと三権分立ってあるでしょう。三権とは何か、司法・立法・行政と空で言えます。これは知っている、できるレベルの学力。それに対して社会科が好き、得意という子はこんなふうに言います。もう用語だけ当然知っている。三権分立っていうのは、これは司法・立法・行政がこの三角形でお互いに牽制し合っているんでしょう、というように説明できる。流

暢に、すっと書いたりする。あるレベルの概念はわかっている。でも大抵、そこで終わってへんですか、ということです。その一方で概念として三権分立を掴んでいても、実際、ニュースとか見て「国会軽視の総選挙」というような報道があったときに、そもそもキャッチできない。国会軽視って、三権分立的に見たら結構やばいことです、実際は。でも関連しているとキャッチできない。社会科が好きだけど世の中に関心なし。そんなことになっていませんか。これ結構、深刻ですよ。

要は、概念と頭でっかち社会の中にあって、概念として勉強はしても、世の中を読み解く眼鏡になっていない。そういうふうに学んだことが生きて働いて使える学力になっていないところがあって、この真正の学びがあるわけ。でも、この真正の学びが、何か実用みたいな感じに思うかもしれないけれども、そういうことが本質ではない。結局、真正の学びとは本物かどうかです。学校と学校の外側を比べたときに、学校は嘘くさくないですかというのが根本の問いかけです。

よく教え子とかが来るんです。教職課程の子も来るんですよ。それこそ古典とか大好きで、古文好きやというのでやっているけれど、その子に、修士で研究しているけれど、高校の時、古文とか好きだった？と聞いたら、嫌いだったと言うんです。でも、大学入って、本物の古文の研究をやったときに、めっちゃおもろいって気づく。これ何を意味するか。高校まで本物と違うものをさせられて、本物の面白さを全然知らないところで、その教科や分野のこと嫌いになっていることが多すぎやしませんかということです。これは勿体ないですよ。

高校というのはある種、完成教育。数学とか、そこで最後の人もいるわけです。そこの出会いが悪かったら、一生数学なんて絶対学びません。少なくともここはつかんで終わってほしいというところ、その教科の一番美味しいところを、学校の中で何とか保証できないかというのが、真正の学びです。

ことばを学ぶとはどういうこと、それって、国語の問題集のこの問題を解けることと違うでしょ。読むために読むもあります。しかし、大学もそうだけど、大体書くために読むとか、読んで議論するとかそういうこともありますよね。さらに言うと、当然世の中で、いろいろと参加していくためには、やはりいろんなことばでコミュニケーションしていかなくてはいけないわけです。人生において、ことばって大事。生きていくときに人間って、強くないから、ことばが必要なんです。どうやって生きていくのかというところで、やはりことばは大事です。一言で言うと、言語生活を豊かにしていく、それがことばの学びと違いますかということです。つまり生きるとはことばを操りながら生きるわけです。ちゃんとそこの繋がりが学びになっていますかということが問われてくる。まさにこの小山先生の実践というのは、この言語生活を豊かに経験しますよね。

一文とか一つのことば、これが重要。良質のことばはこれを自分の人生に肉付けしていくわけです。国語で言えば読むとはどういうことですか。「読む」と「読み深める」はどう違いますか。最近は読むまでいきません。情報収集ばかり。読み深めるというのは、テキストと向き合ってこっちが問い直されるときです。深まるとはどういうことですか。深まるのは同じものを見たときに違ったように見えてくる。そういうときに皆さん「深い」とか言う。「深い」というのは同じものを見ているけれど、違っているように見える。目からウロコというのは、同じものを見ているけれど違って見えてくることです。同じテキストだけれども、全く違って読めてきたなとなってくることが、これが読み深めるってことです。

だから、この真正の学びで言いますと、常に言語生活に繋がる、読み深める経験を、小山先生これでされてきているのかなと思います。まさに前回 11 月の「私達まつり」をとってもそうですね、何か一つの一文のことばがあって、そのことばについてこだわって自分の人生で掴んでいくわけです。

【「教科する」は帰り道を考える】

本物の学びが教科で追求することを、僕は「教科する」と言うんですね。本物の動詞を経験していますか。

国語でいうと、どんな動詞を経験しているか。「国語する」とはどういうことですか。ことばを学ぶとはどういうことかを進めていく必要があるのではないですかということで、「教科する」ということばを使うわけです。

学校って基本回り道するから意味あるんですけど、戻らないです。日常生活の延長線上に学校があるんやったら、学校いりません。日常生活で経験せんこと回り道するんです。日ごろ考えへんことをやるんです。しかし、それは戻らへんかったら足元豊かにならへんわけ。回り道あっても戻りなし。ここの戻りの部分が弱いからそこやっていきませんかというのが、これが私の一つの主張です。まさに、小山先生の「帰ること」、「帰り方を考えること」、そこに繋がるんですね。

そうすると、テキストのことばが、自分の身近な足元で、問い直されるんです。ここがポイントです。生活にもう一回引き戻して問い直す、という訳です。もう一つ、読み深めるといったときは、教師が真ん中で教える、自分の読み方を忖度せよ、ではあかんわけ。同じテキストを見たときに自分がこう読んだよ、でもみんなどう思うよって同じものをともに見る共同注視があります。自分はこう読んだけどみんなどう思う、この一文こう読んだ、なるほどな、でもまだまだ甘いなという形で指さす。教師と生徒とが競る関係が一番。要は教える、学ぶやなくて、1 人の読み手として生徒たちと一緒に学び合う。そのときでも先生は先行研究者ですから、簡単には負けません。まだまだ甘いよってやる。これが先生の力量ですね。結局、揺さぶられる。さすがすげえな、やっぱ物事とらえ方深いね、と。それこそ「浅い」とか言われる。「浅い」って揺さぶってですね、だからそういう立ち位置です。これって大学のゼミの関係そのものというところです。

出藍の誉れなんて言葉がありますが、どうやったら師匠を超えられるか、あるいは師匠を超える弟子を育てられるか。師匠を見据えて師匠の背中ばっかり追っていたら絶対超えられません。師匠が何を見たのかっていうことを見るんです。

伴走者って最近言いますよね。子供を見ている人は伴走者ちがいますよ。子供と一緒に同じものを見ている人が伴走者です。同じものを共にね。そしたらプロとアマとは見え方が違いますから、そこでビビるわけですよ、この人すげえな。そこでその厚みを知るというところです。

そうなっていくと先生の学びを越えていくんです。先生の背中ばっかり追っていたら絶対超えられない。でも、その先生が見ているものを一緒に見るという関係性だったら超えていけます。フラットな関係。だいぶ先生は競りますから簡単に負けないです。そういう特徴が、真正のと言ったときに出てくるかと思います。

その辺の特徴は『真正の学び』の本で、小山先生の実践の輪郭みたいなものを整理したというところです。今みたいな特徴が見事に見えるというところですし、そういうことを通して、読み

深めるその動詞、ほんもの経験が保証されているということが重要です。

そのほんものの読書はつまみ食いと多読になる。要は自分のキャッチしたいものに視野が限定されます。しかし、古典というのが一つキーワードになると思います。古典は古文とは違います。古典というのは読み継がれているものです。つまり歴史が検証してきているんです。長いこと読み継がれているということは、これはいろんな人たちが試されてきた歴史です。本当のクラシカルなものは、読み手を試すんです。だから若いときは若いように見えるし、わからない、でも、何か大事な気がする。大人になって人生経験に分厚くなってきたら、よくわかるわけです。なぜ古典はすごいかというと、風景が違う。その知の巨人、すごい人というのはやはり見えている風景が違う。それは人生経験の厚みがないと追いつけません。根本に置いて、読むということは何かというと、これは筆者の思考と見えている風景に追いつくことです。

だから、ある対象や問いに向き合った先人との対話とその思考の追体験として読み深めることで、視座が上がるわけです。視野が広がる前にぐーと広く視座が上がるんです。よく、「先行研究を検討するのは巨人の肩に乗る」と言いますけれども、いろいろ先行研究を学ぶことによって、その人の持つ考えを血肉にしてここに立てるんです。これが重要です。巨人の肩に乗る、だから思考をトレースすることが大事です。そのためには、読んで捨ててしまうような本よりも何度も再読できる本、これをどの時期に出会うかも重要かと思います。その中で、そういった古典に当たるものは歴史によって吟味されていますから、そのことばや一文を自分の人生において理解することで、軸が生まれる。そういった珠玉の言葉を自分なりにつかみ直したときに軸ができてくる。その軸がないからお互いに同調をするわけです。

この人は勝手にこんなんやってます、軸があるという状況がもっと広がってくると、お互い信頼を置けますから、勝手にやっとるわ、ということです。逆に言ったら裏切らへんなと。この読むということの先に開けてくるのかなと思います。

以上です。どうもご清聴ありがとうございます。

山元 隆春（やまもと たかはる）

プロフィール
広島大学大学院人間社会科学研究科教授。読者反応理論を早い時期から研究。全国大学国語教育学会元理事長。国語教育の第一人者。

◆山元

紹介いただきました山元です。私は専門が国語教育学です。教科教育の中の国語が専門分野で、文学作品をどう教えるかを考えてきて、今、広島大学で、中学校、高校の先生を教えるコースで勤めています。

【残されたトゲを具体化する】

初めにこのことを触れておかなければなりません。小山先生と私達は大学を卒業してからも会合を開いていました。定期的に会って話をしてというのをやっていて、5 年ほど経って、何かテ

ーマを持ってやる 1 年にしようということになったのが 1987 年度のことでした。

メンバーの皆が共通して読んでいた詩人の 1 人に、昨年逝去されました谷川俊太郎さん*[1]の詩がありました。その「かなしみ」という詩をみんなで読むことから始めて、ふた月ぐらいの準備期間を経て、87 年の夏に自分たちが卒業したところの学会で発表しました。論文としての刊行は少し遅れて 89 年で、国語教育研究 32 号で、「現代詩における＜共同性＞の探求―谷川俊太郎のばあい―」*[2]というタイトルです。大半は谷川さんの詩を分担して分析を公開しています。

例えば小山さんが書いたところです。1、研究の動機・目的の（1）の見出しです。「読むことの可能性、あるいは私たちは共同で読むことによってどのような彼方へさらに進み得るか！？」。研究の目的の次はこれです。「私たちが作品を読み始めるとき、意識するしないにかかわらず、読む動機となりながら目的となっているものは、作品を読むことによって生きる力(勇気)を獲得することである」。多分、「私達」の授業でもどこかで聞いたことがあるフレーズではないでしょうか。それから「もはや作品の課題や関心は、その作品の中だけにとどまってはいない。それは私たちをめぐる課題と関心である」。これ、批評理論で言えば、先ほどご紹介いただいた読者反応の批評のテーゼです。ですからそれはもう先、小山さんも言っているんですね。それから最後に「未来へかけて共同性を追求していくこと、自分を変え人を変えながら読み、書いていくこと―。今回谷川俊太郎の作品に勇気づけられながら進めていった会合や作業はどのように自分に変えていけたか。谷川俊太郎自身のロマンと手をつなぎつつ」、自分を変え、人を変えながら、読み、書いていくことをここに書いてあります。

多分それは、今宮で 25 年間やってこられたのではないかと思うんですが、今宮でそういうことをなさる前に、谷川俊太郎を読みながらこんな話をしていましたということを最初に申し上げておきたいと思います。「私達の立っている場所」の実践の源とまではいきませんが、一つの大きな出発点というのは、ここに刻まれているということをお話いたします。

先ほど「トゲを残す」ということばが石井先生の話の中にありました。私も小山さんが言ってくれていたことを考えてみれば、どこか頭の中において、そのトゲがこういう形で残っていたのではないかと思います。それで、ここから先は、私がその後にそのトゲをどんなふうに具体化しようと足掻いたということについて、いくつかのお話をいたします。

【文学的理解の力動性】

自分を変え、人を変える。しかしそれは文学作品を読むことそのものが、既にそういうことなのだろうと思います。前回の第 1 弾では、そこの議論になったと思います。没頭しても人と語り合っても、多分そうなのではないかと思います。先ほど読むということの深めの話がありましたが、作品と出会うこと自体がそうなのではないかと思います。詩や小説を読むことそのものが、それは何かに突き動かされる営みだからではないかと思います。突き動かすことが書かれてないものは多分読まないから。

そんなことを考えながら、10 年前ぐらいに読んだ本ですが、米国の絵本研究者だったサイプ*[3]という人が、こういった点について一つのモデル*[4]を提案しました。周囲の関連情報との関わりで読むというのは考えそうなんですけれども、文学作品を理解するというと、私も含めて多くの人が、テクストを分析する、あるいは周囲の関連情報とのかかわりで作品を解釈すると考えるこ

とでしょう。しかし、今宮高校の皆さんが「私達」でやっていたことは、テクストに対する「分析的反応」とテクスト上の「情報文脈状況」と関連づけを横軸とする「解釈の衝動」に基づくと思いたいんですが、必ずしもそういうわけではなく、むしろ違うことだったのではないかと思います。もちろん授業では、あるテクストについて厳密に解釈することになっていたと思います。ただそれだけではなく、「個人化の衝動」、それから「喜びを味わおうとする衝動」いずれかの衝動に突き動かされる学習を展開されていたのではないか。

この三つの衝動の種類をこの人は指摘したかったわけではなくて、「個人化」とは、読者自身がテクストと生活との交換をしながらテクストを個人化しようとすることで、多分、自分のものにしようとするんですよ、私達は。だけど、それは1回読んですぐに自分のものにはならないので、それをテクストを確かめながら、もう1回読み直していくことを繰り返しながら個人化していきます。それを個人化したものを授業とかディスカッション、グループで話すときに出し合うわけです。当然ずれがありますし、一致点もあります。両方励まされるのではないかと思います。

三つ目の「喜びを味わおうとする衝動」の方はテクスト世界への没頭と、それから模倣も含めた何らかのパフォーマンスを両極とすると書いてあります。喜びを味わう、これも大事なことで、解釈しようと言われて解釈することだけが読みではないですよね。好きな本は時間があれば、夜中でも夜通し読んでおきたい、そういうふうな受容の仕方があります。多分そのときは貪るように読むんじゃないでしょうか。

一方で詩を朗読するということを、皆さんやってこられたでしょうか。あるいは好きな言葉は朗読してみるということをやりますか。絵本の研究者のモデルですから『かいじゅうたちのいるところ』*[5]を読んだら、子供が怪獣たちになることをやるのが、テクストと関わったせいかなということを言っています。回り道のようなことを申し上げていますが、それも反応だし、さっき面白がるって話を金城さんから聞きましたが、面白がろうとするときに、行動に出るか、それとも、もうじっと黙って読むことに没頭するか、そういうことをやはり私達がやると思うんです。

ところが授業となると、得てして「解釈の衝動」のところに生徒さんたちが突き動かされているのではないか。考えながら授業をしていくのだけれど、「解釈の衝動」に国語の読み授業の前で突き動かされて参加したという人がいらっしゃるかもしれないけれど、全員ではないですよね。それから自分の中で大事だった部分をメモして、それを友達とやり取りをする中で考えさせてもらった方が、案外、作品に対してきちんと向き合うことができるのではないかと思います。多分「私達」の授業の中では、「解釈の衝動」だけではなくて、「個人化の衝動」や「喜びを味わおうとする衝動」、この三つの絡み合いがなされていたのではないかと思ったので、このモデルを持ってきました。

みんなが研究者になるわけではないけれども、読む間に自分の記憶を思い起こそうとして、ハッとすることがあって、その衝動が重要になるかもしれません。あるいは、「喜びを味わいたい衝動」は持っているので、その本に没頭している間に何か言いたいことを持つかもしれません。そういったことが起こるような仕組みが、文学教育ではとても大事だと私は思うんです。それを味わってきたのが、今宮の生徒さんたちだと重います。

さっきは「ほんもの」の話がありましたが、私もこのスライドに「ほんものの学び」という言葉を使いました。読書についていうと本物の学びは、日々経験されているのではないかと思うの

で、学校で問いに答えようとして読んでいるときは、もしかすると本物ではないかもしれません。発問に答えようとするときに、得てして本物ではない読み方をするときがあるかもしれません。しかし、意図的にそれを先生が問いかけたものに対して、いろいろと考えて返していくときには頭を使っているから選択しているのだと思います。

サイプは衝動には三つあると言っているけれども、作品と関わろうとする衝動にはいろんなものがあるはずで、一つのチャンネルしかなくて、それをその衝動を持ったように踏まえて言われたら、それはいやですよね。だけど、読んでいる間は「喜びを味わおうとする衝動」や、それから「個人化の衝動」に突き動かされて読んでいって、それで好きになっていくわけです。それを学校では発揮できないとなると、国語は嫌いということになるんです。国語教育を専門にしている人が他人事のように言ってはいけないんですが、だからやはりこういう本を読んで考えるわけです。三つの衝動をどう絡ませていくのかということです。絶えずそれは考えていかなければいけないと思っています。「私達」の授業の中では、その絡ませ合いが行われていたのではないかと思います。「解釈の衝動」のところは大事にしながらもですね。

【リテラチャー・サークルという学習プログラム】

今のようなことを学習のプログラムとして何かできないかと、私も長年こういう研究をやっていますから、いくつか提案をしてきて、10 年前にこんな翻訳書を出しました。『リテラチャー・サークル実践入門』*[6]、本を読み、語り合おうということについてです。ご存知の方もいらっしゃるかもしれません。リテラチャー・サークル、アメリカの実践書です。高校の国語の授業で、先生によりますけれども、いろんな形で進め行われていると思います。

リテラチャー・サークルというのはブックトークと同じもので『読書家の時間』*[7]や『作家の時間』*[8]という本が出ていて、その中の重要な部分で、読んで語り合うというものです。この学習スタイルでは、ひたすら読んで会話する、また読むということを繰り返していきます。そのプロセスでひたすら読むところは、先ほどの喜びを味わう反応ということになると思うのですが、没頭するといった読みをしていくことになります。対話する時間は 10 分ぐらいで、解釈したり、個人化した成果を交流したりしていくことになります。読み終わったらメンバーに紹介していくという形になっています。対話や、読んだ内容をお互いに聞き合うことをしていく中で、先ほども言いましたけれども、自分と違う個人化している人を知ることができるし、自分と同じものを知ることができるし、それだけでもだいぶ違うと思うんです。

「変」ということばが先ほどから出ていますが、変わった反応というのはそうたくさんは出ないと思います。読書過程というのは、没頭している間は個人化するところですから、そんなに人に話はしません。ですから、『羅生門』*[9]の冒頭の 1 ページだけでも読んで気づいたこと、ハッとしたところや大事だと思ったところはどこでもいいから、それと同時にどう思ったのかということをメモして、それを確認してみると、それだけでも結構面白いはずです。案外そこを読んでなかったとかなるんじゃないか。『羅生門』は、国語の先生方もたくさんいらっしゃるので、何度も私は分析しました、もう読み切りましたとおっしゃる方もいらっしゃると思います。案外、そういうことをやっていくと、見逃したところや気づいたところが前と違ってきます。そこから始まる対話が、リテラチャー・サークルのだいご味でもあります。基本的には選んだ本をグループで

読んで話しあって、それから、もう1回、自分で読み直す、というやり方です。

別々の本を選んだ場合は、それぞれのグループで読んだ本をブックトークとかで紹介し合っていく形で広げていくことができると思います。一冊の本でやる場合もあれば、短編の本でやる場合もある形ですが、このようなサイクルを持つようなやり方などを私も研究したり紹介したりしてきました。出発点が谷川俊太郎で、そこで考えたことをやっている感じです。

このリテラチャー・サークルでは対話、話し合いのところがうまくいかないこともありますので、短い時間を使って問題を共有する時間を設けていくことも提案されています。どんな話題で話し合うかだけでも話し合いになるので、話題というのがプロンプト学習のときの問いかけのことです。それがどんな本によいかを話し合っていくような、２年生だから10分か15分くらいでやるんですけどね。

例えば話し合いの話題としては、先ほど翻訳した本に挙がっているものとしては、こんなものがあります。「この本から何か思い出したことを出し合おう」、思い出そうとしたかを話し合うようです。「友達になれそうな登場人物像は。なぜかというと」、それから「この本で一番大切なところはどこか。その理由は」だとか、「作者がなぜこのような本や文章を書いたのだと思うか」、作者の意図の話です。そのこと自体は、わかりません、という答えもあると思います。作者はなんでこんなふうに書いたのか、非常に大きな問いですけれども、それについての理由も含めて課題があって、そうする中で、自分が気づいていなかった文章のいろんなところに気づいていくということです。対話に繋がっていくのではないかなと思います。

こういった話題を、どんな文章でどんな話題を考えるのか自体もやっていいのではないかと思います。これは短い物語でも、ある本を読んでそれをもとにして活発に討論する、それがどうしていいのかっていうことを考えていくような機会です。論争を促すことになりそうな話題を、子供たちに一つ与えて、短編の物語や絵本を読んで議論している。そうしたら何が良かったか、本気で話し合ったときにはどんな感じがしたのか。どんなことを自分が実際にこういうことをやっていくと、話し合いで何を意識すればいいのかを考えていくことに繋がるのではないでしょうか。

これ、シェル・シルヴァスタイン*[10]の『おおきな木』*[11]などでやっていくと、ものすごい論争になっていくと思います。リンゴの木と少年の話で、少年が大きくなる間ずっとリンゴの木は与えるばかりという話です。いい話なのだけれどもちょっとつらい話で、そういった短い話などを使って話し合うことの意味を意識していくというケースもあります。

そして、質問を掘り下げるっていうフォローアップです。お互いの述べたことについて何を言えばいいのかも大事なことですから、質問の仕方です。インタビューのときにも大切なことで、フォローアップの仕方を工夫すると、会話が盛り上がっていきます。一方が感想を言ったらそれを掘り下げる質問を考えてみると、もうちょっと話を続けられる。高校生だと大体できるんですかね。中学生位だとこういったことが必要だと思います。

どうですかこの本はとか、その話題について何か答えはないですかと質問して、作者が強く生きようと言おうと思ったのだと思いますという答えが返ってきて、そこで終わってしまうと、なんか寂しい話になりますよね。少なくとも、どこでそう思ったか、なぜそう思ったかをフォローアップの中で言わなければいけない。インタビューに行ってもらうときには、そんな質問をなさると思いますが、聞かれたほうが答えたくなるような質問の仕方をどうしていかなければいけな

いか。聞き書き甲子園とか、そういうことが話題になるんです。読書で複数の人で話す場合には、お互いの考えを引き出していくことは大変大事になってくると思います。

読みの理解をしていくのはなかなか難しいのですが、人がどのように考えたかということを読んだり、聞いたり、これは、傾聴の仕方、聞き出し方です。問いかけて聞き出す、そういった工夫をしていくことが大事なのではないかと改めて思っています。お互いに聞き出して、話さないと聞き出して、小山さんにだいぶ聞き出された経験からきております。

【コレクティブ・エフィカシーで学習者を育てる】

こういったことを私自身で考えてきたわけです。自分を変え、人を変えるフレーズが今も心の中にあります。今スライドに映している言葉で言うとエフィカシー、これはバンデューラ*[12]っていう人が言った、「自己効力感」に対して出された「内部の集合的効力感」です。『自立的で相互依存的な学習者を育てるコレクティブ・エフィカシー』*[13]という翻訳書が出ています。他の人と一緒に行動することでより多くを学ぶことができるという生徒の信念、1 人では決して発見できなかった豊かな意味の気づきには終わりがない。そういったことを教えてくれる「私達」、小山さんのアプローチでもあるし、今宮の人たちの経験でもあります。多分、こういう信念を作っていったことが大きいのではないかと思いました。終りがない、絶えずその先へと思いを向けていく、そんなメンタリティを「私達」の学びは教えてくれるのではないか。終わりというのは、自分の外の何かの基準による終わりなのであって、意味を作り出すために自ら終りを設ける必要はない。そこは自由だと思います。次に向かう喜びを心に抱いていくということが、できればいいのではないか、そのように思うわけです。

自立心・探究心・協調性のある教室とか書いていますが、そういったことができるのは「いっしょに考える時間を持ちながら沈黙のなかにいる」「居心地のよさ」によって、そうでなければ決して発見できなかった「ゆたかな意味」が当事者たちにもたらされて、一人ではけっして発見できなかったことに気づくことができる。これはキーン*[14]という人が『理解するってどういうこと？』*[15]という本の中で言っていることです。仲良くなりましょうではなくて、安心して沈黙にいることができる、そういったことも保証する。そういう場というのは、豊かな意味というものに気づく条件になっていくのではないか。コレクティブであるということが、一人ひとりのテクストと受容において、それまでは気づかなかったテクストの「ゆたかな意味」を発見する手がかりになる。そう言った見解を「私達」という試みの中で果たして共有されていた、そういった実感を、読んだり、話を聞いたりして、そのように考えます。

◆小山

ありがとうございました。まさか、谷川俊太郎の表題を見るとは思いませんでした。あの論文の章立ての中に、「私の定位」と「私の定位その後」という章があるのですが、今回の「ことばの教育の定位と挑戦」は、その定位で、「私の定位その後」で 40 年後の回収になっていたのかということを今気づいたりしました。

先生ありがとうございました。

注

*1　谷川俊太郎 1931～2024 年　詩人、翻訳家、絵本作家、脚本家
*2　広島大学国語教育研究 32 号　1989 - 08 - 07 発行
*3　ローレンス R. サイプ　1949～2011 年　アメリカ合衆国　教育と文学の研究者
*4 文学的理解の力動的過程図
『読者反応を核とした「読解力」構成の足場づくり』渓水社　2014 年 11 月　山元隆春　著
*5『かいじゅうたちのいるところ』冨山房　モーリス・センダック作（じんぐうてるお　訳）
*6『本を読んで語り合うリテラチャー・サークル実践入門』渓水社
ジェニ・デイ、ディキシー・リー・シュピーゲルほか著（山元隆春　訳）2013 年 4 月
*7『読書家の時間：自立した読み手を育てる教え方・学び方』新評論　2022 年 6 月
*8『作家の時間：「書く」ことが好きになる教え方・学び方』新評論　2018 年 7 月
*9『羅生門』　芥川龍之介
*10 シェル・シルヴァスタイン　1930～1999 年　アメリカ合衆国の作家、イラストレーター
*11『大きな木』　あすなろ書房　（村上春樹　訳）　2010 年 9 月
*12 アルバート・バンデューラ　1925～2021 年　カナダの心理学者
*13『自立的で相互依存的な学習者を育てるコレクティブ・エフィカシー』北大路書房
ジョン・ハッティほか著　（原田信之　訳者代表）　2023 年 10 月
*14 エリン・オリヴァー・キーン　アメリカ合衆国　小学校教師、現職教員の授業力向上サポーター
*15『理解するってどういうこと？』新曜社　（山元隆春・吉田新一郎　訳）2014 年 10 月

ことばの教育の定位と挑戦
2　ディスカッション

日時　令和７年１月 25 日（土）13：00～17：00
場所　大阪府立今宮高等学校　２Ｆ多目的ホール

■参加者
スペシャルトークメンバー
金城宗幸、石井英真、山本隆春
桝井英人（京都大学・関西大学非常勤講師）
小山秀樹(大阪府立今宮高校教諭)
ご参加の皆様
(敬称略)

◆ 小山
第 2 部・ディスカッションは、スペシャルトークをしていただいた 3 名の先生方、そして本日

ご参加くださっている皆さんとともに進めたいと思います。コーディネーターには、私達まつり第１弾の研究協議に引き続き、桝井英人先生にお願いしております。桝井先生は、大阪府立高校に定年までお勤めの後、現在は、京都大学、関西大学で、国語科教育法などの授業をされています。桝井先生には他の誰にも書けない『「国語力」観の変遷』という著書がありまして、そこでは国語力の変遷と未来の展望が語られています。先生、よろしくお願いいたします。

◆ 桝井

はい。今からの協議は、フロアにおられる皆さんが主役です。今日の会は土曜日に開催されています国語の授業に関する集まり「土曜塾」シリーズの大きな祭りということで、やはり現場の先生方の今後に活かされるかたちにできればと思いますので、忌憚のない意見を出し合い、質問も含めてやり取りができたらと考えています。まずは、スペシャルトークのお三人から、お互いにご意見を出していただいてディスカッションのとっかかりにしたいと思うのですが、よろしいでしょうか。

◆ 金城

僕が新幹線でこちらに向かいながら考えてきたことを、うまく拾ってくださってありがとうございます。石井さんのお話に「ほんもの、オーセンティック」ということばがありました。それは、僕の解釈としては一次的体験というか生（なま）の体験、自分にとって情報のような与えられたものではなく自分で勝手に思ったことであるとか、掴みに行くことであると捉えているのですが、それで合っているでしょうか。

◆ 石井

そうですね。一般的にオーセンティックラーニングというと、実生活とか学校の外側とつなげるということですが、実は、著者性（authorship）、自分に正直ということを意味します。オーセンティック（ほんもの）とは、嘘臭くないということです。嘘臭くないとは、正直である、自分に正直ということです。世の中のドロドロに向き合う時に、快・不快という感じ方が当然発生し、そこで自分が問われる。世を問うことで自分が問われ、そこで自分が正直になっていく。自分の内部だけを見ていても自分のことは分からないでしょう。外部とかかわって初めて自分が分かる。一次体験というのは、世界を体験するだけではなく、自分に気づいていくことだと思うのです。先ほど、金城さんと立ち話をしていて、なんとなく自分と近い空気感みたいなのを感じたのですね。どうしてかなと考えたら、自分に正直に生きてきているということかなと。私は淡路島出身で、軋轢もあった中で割といい子ちゃんで来たのですが、大学でばんからの雰囲気にほぐされてすごく楽になったんですよ。まさに自分に正直であること、詰まるところはそこに至るのかなと思います。今の時代は、自分に正直であることが難しいし、自分が何者なのか分かりづらい。だからこそ、ほんものの学びによって解いていくわけです。山元先生のお話を伺い、読むという経験の中で、解釈の衝動とか、個人化の衝動などがモノトーンに染められてしまうことでドロドロしたところが単純化され、かつ押し付けられるから面白くない。そういうことになりがちなのかなと思いました。ほんものの文学体験とはどういうことなのか、本質の部分を分析的に示してくださったなと思いながら聞かせてもらいました。

◆ 山元

ありがとうございます。深い読みとは、脳が気づかない、読者自身が読みについて気づいてい

ないことの掘り起こしのようなこと。人とやり取りしたり、自分の中で考えたりすることで深い読みが起こるのかなと思います。自分に正直に生きるのは難しいことですが、自分で考えたり、人と話したりする中で気づくことはたくさんあると思います。どう読んでいるかということは、実際には人とはほぼ話してないんですよ。たぶん読む行為を共にすることで、読んでよかったなと思えるのではないのかな。金城さんなんかはそういうことをやってきたんじゃないのかな。

◆ 桝井

はい。皆さんの中にも経験されている方はおられるでしょうが、はて、深く読む行為を共にするということを、実際に現場に持っていけるのか、自分の教室でできるのか。通り一遍の読みではないですよね、一回読んで終わりではないですよね。図式化して終わりではないですよね。何回も読まされ、突っ込まれますよね。一人じゃないですよね。一人じゃなくてみんなで読むのが、我々高校の国語教育であるわけですが、どの辺が現場に持っていかれる部分なのでしょうか。
それではフロアの皆さん、もやもやしたこともここで発言していただければと思います。どなたからでも結構です。質問でも感想でもどうぞお願いします。

◆ 笠原（神奈川県立横浜翠嵐高校）

大学院にいた時、たまたま小山先生の授業を知ることがあり、2002 年に「私達が立っている場所」の授業を見せていただいたのが最初でした。その時、定時制との関係で、確か下校時刻と部活動の諸対応ができないという問題だったり、服装の自主規制の問題だったり、そういう話を聞かせていただき、学校の生徒指導体制や教員の方の管理の都合などと、どうバランスをとっているのかなということに興味を抱きました。自分の経験で言うと、学校で当たり前のように行っている生徒指導について、話し合いをした時に軽く圧力をかけられたことがあったのです。先生がどういうふうに生徒からの疑問を拾い上げたのか、学校の大人がやっている都合のようなものとぶつかったことはなかったのか、またそういう時にどういう工夫をされたのか、教えていただきたいと思います。

◆ 小山

ご質問ありがとうございます。当時は「私達が立っている場所」が出来立ての頃で、自主規制の問題と下校時刻の問題を、『「である」ことと「する」こと』の授業の後に考えたりしました。『「である」ことと「する」こと』を学びはしても、教科書の中だけじゃなくて本当にそれを実践しないと学びにはなってないだろう。学校の中の指導のあり方とどう関わるのだろうかと、私も悩んでいたように思います。授業の中で生徒が自分たちの考えをまとめ、それを生徒指導の先生や学校に提出する、あるいは主張するというのは良いのか悪いのか、できるのかできないのか、考えた挙句、私はその時の教頭先生に「これは許可を求めることですか」と聞いたのです。そしたら先生は 5 秒ほど考えられて、「許可を求めるようなことではないですよ」と言ってくださって、私はそのことばで救われました。学校の指導のあり方など、いろいろ制約がある中で、教員は教員として生徒の力を伸ばそうとする。決まった答えはないのですが、考えてみれば、そういうことを勝負することとしてやってきてたなと。あの頃は総合学科最初の頃で、学校を作りたいという気持ちに後押しされていたんやなと、今になって思います。

◆ 桝井

はい。他には。

◆ 河田（大阪府立生野高校）

私は国語科の教員ですが、例えば、石井先生の「社会科は好きだけれど社会は嫌い」というお話や、山元先生の三つの衝動のお話を聞いて、授業では解釈のほんの一部しかできていないのではと反省させられています。読みには２種類あるのではないかと思うのです。知っていることを確認するため、つまり、分かっていることをことばにするための読み方と、全く知らないことを読むことで知る、発見するという読み方。どちらかというと学校でやっているのは前者のような気がします。知っていることを増やすために、数的に読んでそのことで経験を積ませる。大学入試や社会の要請を考えると、そちらが主流になるのはやむを得ないのかなと思いつつ、でも未知のものを掴むためには、そこからの飛躍が要ると思うのです。「私達が立っている場所」はまさにそういう授業ではないでしょうか。受講者であった金城さんは、その飛躍をどういうふうに学び手として乗り越えて行かれたのか、また小山先生や桝井先生がどのように意味づけされてきたのかをお聞きしたいです。

◆ 金城

飛躍というと、僕も教えてもらいたいくらいです。これって教えていないのではないのかな。個人化の力というか、作品を読んで、我がごととして落とし込むって教えられる？　どうなんやろ、それを僕は教育者に聞きたい。僕は教えてもらった覚えはないので。それでいいのだと気付かされたり、「いいよ」って言ってもらった覚えはあります。それがもしかしたら教育なのかなと。「そう、それ、それ持っとけ」と言われたのが教育、僕が感じた乗り越えで、ゼロから獲得したものではないという実感です。

◆ 小山

教師はトゲのようなもの、タネのようなものを残し、それを受けた人それぞれが自身で育んでいくというのが理想ですね。自分で育むから主体性は担保されるし、大きな可能性も出てくる。私はそれを「非連続の連続」と呼んでいます。教師の仕事はあらゆる方法を使ってトゲやタネを成功体験とともに残すことだと思います。特別な場面をつくるということがヒントになるかも。

◆ 桝井

非連続って分かりやすく言えばどういうことですか。

◆ 小山

非連続というのは、例えば私が何か生徒に言ったりする。そのことを受け止めて、そのまま知るのではなくて、その人が自分で育てていけるように、そのために最後まで教え切らないというか。言い切らないというか。そういう姿勢を保つことだと思います。

◆ 桝井

その人自身の読みを作っていく。心の高まりをどう掻き立てていくか。そのやりようには各先生の個性もあると思うのですね。とんでもないことを言うてくれる時に、そのチャンスの芽があるかもしれませんね。やりようは経験を重ねると得られるのかもしれません。キャッチしたり、突っ込んだりと。川田先生、何かご意見はありますか？

◆ 河田

先ほど金城さんから、「励ましてくれたのがよかった、きっかけになった」、一方では「浅い！」

と言われるパターンもあったとお聞きして、その上で、桝井先生もおっしゃったようにこちらの嗅覚みたいなのが要るんだろうなと思いました。その嗅覚をどう育てて良いのかがわからない。

◆ 桝井

一つには、こっちが本気かどうかやと思います。「そうやねえ、それもいいねえ」って、大学生が模擬授業でかたちをやるんですけど、それではあかん。「違う。それはあかんやろ、浅い！」が、本気であるか。「ほんまに思ってなかったなそれって」と、言えるかどうか。その出し方の個性はあると思います。

◆ 石井

一番の飛躍は、読めていないと自覚することだと思いますね。読めているつもりが読めていない。先ほど山元先生のスライドの中では、「このことばがなかったら」ということが核心でした。本当の深い読みとは、作者がこのことばしかないというこだわり抜いた部分を追体験できるかどうかです。追体験によって読めていないことに気づくわけです。一度、その気づきがあれば、スポーツなどがそうであるように元には戻らないです。人生で一度、読むとはどういうことかの再定義を置くとことができれば、そこからこだわり始めるんです。その一瞬があるかどうか。私はそれが飛躍やと思うのです。そうすると、分かっているつもりが分かっていないと気づく。人生すべてそうです。それがあるかどうかで視界のひらけ方が違いますから。先ほどの山元先生のお話にあったように、精読の意味は、突き抜けるということだと思うのです。ほうっ、なるほどという一つの経験が、他の読みまで変えていく。そういう立ち止まりが大事だと思います。

ところで、第１弾の動画などを見て思うのですが、小山先生は優しい先生なのか、厳しい先生なのか、怖い先生なのか、どうなんでしょう。僕はすごく厳しい先生やと思うんです。小山先生の「私達が立っている場所」の授業って厳しい授業なのか。どうなんでしょうね。

◆ 河田（11 期生）

私は卒業生で、「私達が立っている場所」を受講しました。小山先生が厳しかったか厳しくなかったかですが、発表の場で、自分たちの詰めが甘い時は厳しいなと思いました。それ以外は、筋が通っているか通っていないかを大切にされていたのではないかなと思います。さっきの非連続の話ですけれども、私が思ったのは、小山先生はよく問いを立てる先生で、「ここでまた問いが生まれました」とおっしゃっていて、その答えがすぐ出ることもあれば、結局あの問いの答えはなんやったんやろと思うこともあって、それが非連続じゃないかなと思いました。

◆ 桝井

ありがとうございました。いいですね。授業の内実が生の言葉でよくわかりますね。

◆ 小山

答えはすぐには出ないけれど、教室で自分たちの課題として共有することはできるんです。すぐれた教材は、その時点で気づいていなくても、自分と社会とのかかわりを考えさせてくれます。気づきのためには授業でのコメントや投げかけが大切です。気づかせたいと思いながら授業してきました。

◆ 桝井

はい。そういうことだそうです。気づいてもらう、テキストを面白がってもらうということですかね。

◆ 加賀美（八尾高校）

興味深いお話をありがとうございます。「私達が立っている場所」は選択の授業ですよね。私は普通科におりまして、現代文にしても全員選択のかたちです。全員選択では、今お話になっていることは一層大事だなと思います。自分が思うこと、面白がるということが基本中の基本で、国語の教師をしていてそれ以上大事なことはないなと。ますます痛感しています。自分の意志で来ているばかりじゃない子どもたちを相手に、「自分はこうや」と言えるか、テキストがあるにしても素直に言えるかどうか、40 人で教室で話をしたとしても。それから、相手の意見を本気で面白がれるか。それにはテキストをちゃんと読む。ちゃんと読んで、「先生分かれへん」とか、友だちに「どういう意味や」って、お互いに言えるか。たぶんこれは心理的安定性というのやと思うのですが。その辺の担保のところで私は今悩んでいて、そこのところをどういうふうに確保しているのか、フロアの方でもこんなやってるよと教えていただけたらと思います。

◆ 桝井

どんなふうに場を作れるか。

◆ 小山

私は現在まで４校経験しています。教室の実情はさまざまです。まず授業の目標をしっかり持って、指導は生徒に合わせてステップの大きさを考えてきました。そうして生徒の発言を引き出したり、ある時は大げさぐらいに「すばらしい！」と言ってみたり。リアルな場にするためにはなんでもやってきました。面白いと思える子が出てきたりしたら、その子に発言させたりとか、授業外でもくっつきに行ったりとか。ちょっとでも自分の指導できる幅を広げようと。参考になるかどうかわかりませんが、そんなことを試みとしてやってきたと、振り返ることができます。

◆ 桝井

今、たどり着いているところは場ですよね。話せる場ということですよね。実は、心の中で、何か心以前の、湧いているものがあってことばになって出てくるんですけども、テキストに向き合って、例えば「ある日の暮れ方」とあれば、「ある日のっていつやろなあ」って、そういうことを言うてもいい、ふっと湧いてきたことを言っていいということをちょっとずつ積んでいるうちに、不思議なんですけども、言えるようになっていくのは確かなことです。あえてちょっと突っ込んでことばを湧き出させる。こんなこと言うてもええんやって思える経験を積み重ねていくうちに、言えるようになっていく感触はあります。皆さんいろんな方法をされていると思いますけれども、小山先生が言われたようなことも組み合わせてやっていくのがいいのかなあという感じです。では次の質問の方へ。

◆ 寺の下（大阪星光学院）

子どもたちの前に立つ者として、この作品、この評論を勉強する大義のようなものを語ることがあります。評論だったら世界の一つの側面を知るためであり、小説なら虚構の中に一つの真実があるからだよといった話をします。例えば、「走れメロス」のように、友だちが磔になって自分を待っているという経験は我々にはまずない。けれどもあそこでいう信頼だったり、失望だったりというものは僕たちも考える価値のあるものですよねと。うちは理系の多い進学校ですので、数学、理科などで、パキッと明確な答えを求めがちな子どもが多いです。けれども、世の中、生きていると答えのないことの方が多いでしょうという話をしたら、確かにそうだと。A があって

B があってどっちも正しそうだけど、どっちも間違ってそう。でも選ばないといけないことがあるよね。例えば「高瀬舟」。喜助は最後、あそこで弟を殺すべきだったのか。弟の命のために医者のところに走るべきだったのか。この辺りを精査すると盛り上がります。答えがないけれどどう思う？　そうなった時に子どもたちは、そうだなあと考えてくれているように思います。大義ということで、先ほど山元先生のお話の中に谷川俊太郎が出てきました。詩を扱う際に、私が言うのは、世界の美しさや悲しさ、悲惨さというものをことばにしようとした人たちの作品を見てみましょう、ぐらいではあるのですが、大義というもの、子どもたちにこうだよとまだ伝えることができない。そこで先生方に詩を国語の授業で扱うことの大きな意義といいますか、そういうものがあれば教えていただきたいなと思います。

◆ 桝井

詩をどうするか、山元先生どうですか。

◆ 山元

昔、高校で、授業中に伝えられないことを通信にして後で読んでもらうということを試みたことがありました。私が生まれた鹿児島県の果てで、繰り返し繰り返し、波が打ち寄せてくる風景を思い出して、それをことばにするとどうなるか、自分の作った詩を通信の中に書いたんです。その詩を読みますね。

かけっこ

大理石でできた燈台がある
岬ひとめぐりの
かけっこのはじまり
ぼくとぼくの影法師

もう一度背伸びして
頭の上の雲をつかむか
それともこのまま佇んで
暮れていく海を見てるか

鴎が翔ぶと
動かない背景がよけいに
寂しい

大理石でできた燈台がある
岬で
大理石でできた燈台にもたれる

燈台の大理石に染みついた斑は

大昔の地熱のおかげ
焼け爛れたはずの地面が
いつの間にかうつくしい輝きを持った
だから決してあきらめるんじゃない

もう一度背伸びして
頭の上の赤い雲つかむか
それともこのまま佇んで
暮れていく海を見てるか

もうすぐ太陽が沈む
けれど太陽は濡れない

いまぼくにはほしいものがある
いまぼくにはすきなひとがいる
いまぼくの心臓はが激しく波打って
いまぼくには駆ける足がある
だからあきらめるんじゃない

繰り返しばかりの詩です。詩は大事だよという伝え方もあると思うけれども、抒情を感じる、余韻を楽しむというか、リフレインなどの表現を通して心に働きかけられるのかなと。それこそ谷川さんにはたくさん絵本もあります。大事なのは詩の表現の効果を味わうようなことなのかなと。

◆ 石井

日本の授業の特徴の一つが、学級を作りながら授業をすることですね。学級づくりの意識があるか、教室に文化があるかどうかによって授業が変わってくる。授業をしながらどういう人間関係や授業を作っていくか。実は休憩時間よりも授業中の方が子どもは言いたいことを言えるかもしれないのです。授業中には案外真面目なこと言えたりするんですよ。そしたら自分を発見できたりする。だから学級づくりの観点を持って授業をしていく。これは基本の授業、日本のお家芸みたいなところで、古くはあのね帳みたいな発想なんです。昔、日記指導というのがあり、学級通信などにつながってくるんですけど、生活に取材して、自分はこんなところ面白かったみたいなことを言い合い、読み合ったりする中で、学級ができていくんです。私は、小山先生の授業は、生活綴り方的教育方法と一緒だと思っているところがあります。生活の中に取材してそこからことばでつながる。生活のいろんな問題をことばにしてつないでいく。ことばの指導であるとともに集団の指導。そこから学ぶことは多いと思うのです。昔は生活綴り方といって作文を書くのがありました。今の子ども達には詩の方が、自分らしさを出しやすいのと違うかな。それが表現のきっかけになるような気がします。

◆ 大塚さん（桜和高校 3 年生）

私は高校三年生で、桜和高校という新しくできた学校の一期生です。今日は、父に勧められてここに来ました。私の学校には教育文理学科という学科があって教育分野について学べるのです。私が今の高校を選んだきっかけは、学校が嫌いで行きたくないと父に伝えたら、4 つくらい候補を出されて、その中から消去法で決めたんですね。学校嫌いやからこそ、学校に通う子たちに伝えられることがあるんじゃないかなと、3 年間、教育について学ぶ中で、自分が教育の現場に携わろうと思えるようになりました。先ほど石井先生が面白い授業の話をされていたじゃないですか。それと最初に、いい学校ってなんですかという話をしてくださったと思うのですけども、私が考えるいい学校というのはまだなくて、ただ一つ言えるのは、面白い授業ってこんなんじゃないっていうのがあるんです。教科書をなぞるだけの授業では面白くないと感じてしまうんですね。実は、父が候補に出してくれた学校に今宮高校が入っていて、今日、小山先生の授業の概要を聞いて、受けたかったな、もっとしっかり考えたらよかったなと思いました。金城さんは、高校生の時に好きな教科だけ取っておられたと。それが本来あるべき高校の姿じゃないのかな。教養と教育は違うから、好きなことを学ぶ場所がもっとあっていいんじゃないかなと思うのですが、先生方は、今後、授業がどう変わっていくべきだと思われますか。

◆ 桝井

はい。これが最後の質問になると思うんですけども。

◆ 石井

そうですね、一つ逆に伺いたいんですけども、高校入試に向けてとか、大学入試に向けてとかありますけど、それ以前に小学校の時の思い出ってありますか。

◆ 大塚さん

嫌な思い出ばっかりです。周りの子と馴染めなかったというか、自分の価値観の合う子がいなかったので、クラスにいることが苦痛だった。

◆ 石井

なるほど、そのようなことがあって不登校の子が増え、学校以外に多様な学びの場が広まっているわけですね。今、高校の普通科では定員割れが頻繁に起こり、一方で、柔軟な学びの場というか、通信制も含め、普通科以外への転入者が増えています。選択肢が増えること自体は良いことではありますが、合わへん子はどうぞ外に、というようなことになって従来の学校本体がどんどん硬直化していくのが問題だと思うんです。本来学ぶ場であったはずの学校にどう回帰していくのかが問われる。その一案として、高校などでは自由に探究する出島に当たるような隙間空間が必要だと思います。出島は外国と違います。つまり学校内の出島的な場で学んで、空気感が変わっていくというようなことができればいいかなと。

実際、冷静に見てみると、確実に状況は変わってきています。例えば共通テストの問題をご覧になったら分かりますが、メッセージがあるわけですよ。ダイヤモンドはなぜ光り輝くのかってね、物理ですが、難しい計算は要らない。教科のイメージをちょっと変えていってもいいんじゃないかというメッセージがあります。結構面白い取り組みが出てきていますよね。小山先生の実践も、総合学科の中での新しい挑戦であるわけです。そういった足元で生まれている新しい何か、そこにほんまの学びがあり、学習指導について問い直すヒントがあるような気がします。

◆ 山元

石井さんがおっしゃったことの関連ですが、面白い授業とか面白がることを目指す面白い授業とか、そういうことを目指す取り組みが大切なことだと思います。そういう取り組みの中で、今日いくつか話に出てきたようなほんものの体験ができる。ほんものというのは、実生活というわけではなくて、本気になる、見方を問い直すような学習指導、授業が行われるということです。いろんな教科の一つ一つで、そんな取り組みが行われることが一番大事なことではないかなと思います。そういう場ができるとすれば、学級集団の中で縛られるのではなくて、同じものを学んでいく場として学校が変わっていけると思います。

◆ 金城

僕も学校がそんなに好きではないタイプだったんですけれど、それでも楽しかったのは自分の好きなことばっかりやっていたから。めっちゃリスク取ってたんやな。もちろんやりたくないこともあるけれど、それも必要といえば必要だったのかな。一つ思うのは、小山先生、今日、お会いして、やっぱりこの人はこれしかないというスペシャリストじゃないですか。「私達が立っている場所」の人。教育システムは行政が変えるしかないけれど、そうじゃなくてマンパワーというか個人で、例えば小山先生のような人がみんなにトゲを刺し続ける。そういうふうにそれぞれの教員の方がスペシャリストになって、自分の惑星を作って行ったら、教育がちょっとずつ改善されていくかもしれない。それくらいの個人の決断とか、覚悟とか、スペシャルになるんだという、作家としてはそういう人が欲しいと思う。夢があるし。自分の人生のスペシャリスト。だからあなたのスペシャルな道はきっとあって、それが僕のようにリスクを負わないといけないかもしれないけれど。システムと戦うとはそういうことだと思います。できればそういうふうに教育が進んでいけばいいなと思っています。

◆ 桝井

はい。さすが、見事に言うてくださいました。ただ我々には現場がある、そう。システム制度がどうであろうが。時間が来ました。これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

3 「私達まつり」第 2 弾 参加者のことば

3-① スペシャルトークについて

1. 金城さんのお話は、日頃聞けない話ばかりでとても面白かったです。面白がる、というワードはこれから仕事をする上で大切にしていきたいと思います。石井先生のお話も、山元先生のお話も、仕事の面白さを再発見するヒントに満ちあふれていました。ありがとうございました!(教職員)

2.石井先生のお話の中で、negative capability を生徒に持たせられるかという点について改めて考えることができました。自分の授業を振り返った際に英語は国語に比べるとどうしても文の内容は浅くなってしまいますが、生徒たちに考えさせるチャンスを与えて、答えが出なくてもいいんだと思えることができました。(教職員)

3.不快感、モヤモヤをいかに引きずらせるかが探究へと繋がってくる、という石井先生のお話が特に印象的でした。また、課題研究への取り組みをするにあたって、本気で反応するということはこちらも心がけたいところとして胸に留めております。自分の引き出しを増やすためにも、自分が様々な文献に触れるべきだと痛感しました。(教職員)

4.小山先生の実践について、授業を受けた卒業生である金城さんからの実感のこもった言葉、それを理論で形にする石井先生の言葉、若い頃からの研究仲間としての視点も含めて、小山実践の意味を読者反応論的に解き明かす山元先生の言葉と、大変多様で贅沢なお話でした。ご紹介いただいた理論や書籍をこれから読んで復習するのが楽しみです！
(教職員)

5.読むことについては、本質を捉える手段であり、かつ自己の中で解釈を確立することであるという課題を考えさせられる内容であった。特に、国語教育においては教員、生徒が共に読み深めることに重点を置く必要性を感じられた。また、そういったことを深めつつも型にはまらない授業を行っていくべきだと考えさせられた。(学生)

6.3 人の方のお話を聞いて、「ことばの力」をつけるということの意味を考え直す機会になりました。大阪府内の私立高校で国語科の教員として勤めています。地域の受け皿のような学校、いわゆる「困難校」です。授業中は数人しか教科書を開かない、何人もの生徒が教室から出入りする、といった状況で、自分が授業をしている意義とは何かを日々問われていると考えています。そのような学校だからこそ、生徒たちに生きたことばの力をつけてもらいたいのですが、そんな授業をできている自信がありません。私自身、学校に希望を見出せなかったことが今の勤務校に勤めている理由です（最後に質問した高校生のように)。ところが、何をどう準備すれば生徒に授業が届くのか分からず、迷走する日々が続いています。その中であっても、小山先生が「生徒の状況

にあったステップを」と仰っていたり、桝井先生が「生徒に小さな疑問を出させるようにすればいい」と仰っていたりしたことを聞き、できることからトライアンドエラーでやって行こうと思えました。恥ずかしながら、授業が崩壊しているからと諦めて行事などに力を入れていた面がなかったとは言えません。生徒を信じて、同じ目標を見る伴走者としてこれからも国語科教員として頑張りたいと思えました。ありがとうございました。

書き終えてから気づきましたが、ディスカッションの内容も混ぜ込みながら書いてしまいました。すみません。(教職員)

7.大変貴重で、学びがあり、有意義な時間でした。金城さんの話、石井先生の話、山元先生の話がそれぞれ内容は違うはずなのに、本質では同じところを突いているような、不思議な感覚でした。やはり人との繋がり(私達が立っている場所は他者との関係性で見えてくるものだと思うので)や学ぶということの本質は何か共通項があるのだと感じました。(教職員)

8.お三方のトークそのものが素晴らしい作品であると感じました。そこから、私は個人的に、勝手に、また authentic に考えていました。特に、現在英語教員である私には、自分の授業ではどんなことができるだろう？と個人化する衝動を掻き立てられていました。巨人の肩に乗る経験(肩にたどり着けていたかはさておき)をさせていただきました。ありがとうございました。(本校卒業生)

9.金城さんの「勝手に思う」「おもしろがる」ことという言葉がささりました。原作者として勝負されている方のことばだけに、重みがありました。その原点が高校時代の「私達が立っている場所」ということで、それをお聞きしただけで、どんだけすごい授業やったんやと、ただただため息です。(教職員)

10.日頃、本を読む事もなく、学生の頃も深く読むという体験もしてなかったですが、ちゃんと時間を作って本を読んでみたいと思いました。(本校保護者)

11.三名の話を聞き、とても勉強になりました。特に印象に残っているのが、生徒が真の学びができていない頃は勉強の面白さを知ることはない。高校が最後の学びになる生徒もいるかもしれない中で私が行っている授業は生徒にどのような影響を与えているのか深く考えるきっかけになりました。(教職員)

12.印象に残った言葉「快・不快は表裏一体」「勝手に思う自分を保つ」「空き地がなくなった」「その先生の授業からおもろい人が出る学校」「語りたいものが生まれる学校」「人と接することは自分の身体をさらすこと」「応用＝問いと答えの距離が長い」他、多数あります。(教職員)

13.遅刻してすみません。お話をほとんどお聞きできていません。1 部の終わりにまとめをしてく

ださったらうれしいなあと、思いました。（教職員）

14.お三方がそれぞれの特徴・ジャンルを活かしたお話をしてくださり、勉強になりました。（教職員）

15.金城さんの率直な言評、石井先生の実感のこもった教育論、山元先生の物静かな読書論（集って本を読むこと）を通して、小山先生の授業の魅力をあらためて感じ取ることができました。教室における「とげ」「不快」はともすると避けがちなことでしたので、新しい視点でした。教員のなかにも、（国語）教育観が異なることによる「不快」はあると思います。そうした「不快」を受け止めて、真の共同体としての学校作りができれば良いと思いました。（教職員）

16.金城さんを初めとする御三方の貴重なお話を聞くことができました。国語の授業とは、言葉とはという国語の本質を知ることができました。特に、金城さんの「勝手に自分で思う」事を「面白がる人が必要」というお話では、授業でと同じことが言えるのではないかと感じました。たとえ児童・生徒から正しい答えが出なくても、教師はそれを頭から否定するのではなく、そういう答えもあるのかと面白がってみることで児童・生徒の学びも深まるのではと思いました。（桃山学院教育大学学生）

17.参加できてよかったです。石井先生の、問から答えの距離が長いのが良いというお話が興味深かったです。近年の、ダイパであったりコスパであったり、即レス！快楽至上主義！的な考えに対して思うことがあったところ、スッキリ快活に言語化していただいた気分です。というより、気持ち悪さを待つ、もやもやを引きずる、それでいいんだ！というか、、。探究活動を指導する中で個人的に抱えていたトゲも取れました。
対話しながら本を読む、ということも実践していきたいです。（教職員）

18.金城氏の、「おもしろい」を、「快・不快（本能的側面）」と「興味深い（知性的側面）」に分けて考える発想に心惹かれました。常々「興味深い」という側面で捉えてきましたが、「快・不快」を提示しないと聞いてもらえないという、感覚的に捉えてきたことを見事に言語化されていたと思います。これが、小山先生が追い求めていた教育かなと、一人よがりですが思いました。また、石井氏の「地味にいい学校をつくりたい」、「いい学校は、明日行きたいと思える学校」は、学校経営を仕事とする私にとって心に刺さる（棘の刺さる）言葉でした。遠方からの出席だったので、お二人のスペシャルトークしか出席できませんでしたが、有意義な時間を過ごすことができました。このような会を企画運営した小山先生と、今宮高校の皆様に感謝申し上げます。（他県高校教職員）

19.漫画家の方の創作に関するエピソードや世界の見方、価値観の一端を知ることができ、非常に面白い時間でした。（附属天王寺）

20.3 名ともともて面白く、興味深くお話を聞かせていただきました。金城さんがおっしゃっていた「勝手に」というキーワードは、自分の中でもなぜこんなに引っ掛かるのかわかりませんが、最近自分が漠然と考えていた何かにリンクしているように思い、いい意味でずっとぐるぐる考えさせられるキーワードをもらったなと思っています。そして、石井先生のお話の仕方が落語家さんの口上のようで、すごく聞き入ってしまいました！お話がとてもお上手だなと思ったのですが、先生は何回講演をしても人前に立つのはいつも怖いとおっしゃられていたこともすごく印象的でした。（本校卒業生）

21.登壇の先生方のお話を聞いて、私なりに「私達の立っている場所」の教育の意味を考えることができました。感謝いたします。

金城宗幸氏は、「私達の立っている場所」の授業が、主観的面白さ（快・不快）を持つ段階から、知的関心を経て、自分の意見を持つ段階、それが面白がられる（関心）をもって共感される段階という展開を持っていたことを示唆されました。この授業を受けた経験が、漫画を書く場合にも、生き方にも、糧になっていることを述べられました。核心をついたお話に共感を覚えました。

石井英真先生は、自らの「真性（本物）の学び」論の観点を、「私達の立っている場所」に関連づけて話されたと思います。それによって、「私達の立っている場所」が、現実のリアルにふれ、学習者の人間的成長を促し、自己と自己を取り巻く世界との関係を編み直し、自ら学びを計画実践することにつながるという点で意義深い活動であることが理解できました。また、金城氏の話に関連づけ、記憶・経験の「トゲ」（河合隼雄）が学びをもたらすこと、時間をかけて考えたことが生きるための応用力になるという話も、興味深く思えました。すでに、記憶・経験の蓄積について、小山先生は、経験が学習者の学びの種であり、エンルギーであると、述べています。学びにおける経験の意味が、私ににもよく理解できたことは収穫でした。

山元隆春先生の、小山先生他との共同研究の話によって、「私達の立っている場所」の源が遙か遠くに根を持っていることを知りました。また、山元先生の、「文学的理解の力動性」の三つの衝動（解釈・個人化・喜びの追求の衝動）は、なぜ学習者が教材を基に考え抜こうとしたか、グループで激しく語り合おうとしたかを解くヒントになるものでした。「私達」は、つまるところ、「個人化」でもあることが理解できました。しかし、現在の国語教室で、文学的理解の衝動性が学習者に機能しているかも問う必要があると感じました。学びからの逃走は、その衝動を遠ざけているようにも思いました。その克服には、小山先生の言う「力のある教材」が必要かと思いました。

以上のとおり、先生方のお話は、「私達の立っている場所」を、私なりに定位するヒントを与えていただき、ありがたく思いました。

ただ、①25 年にわたる歴史的変遷、②授業自体の、個から私達・社会へと続く共時的・空間的構造と、③現在の学習者と過去の学習者を繋ぐ通時的構造については、十分に深められなかったと思います。また、④授業形態（個別学習・グループ学習、ゲストとのトークなど）や、授業過程の段階的展開（自己と現代社会を見つめ・考えさせ、その課題に取り組むといった三段階）、⑤それぞれの教材（開発）と編成についても言及が乏しく、今後、定位していただければありがたいと思いました。（教職員）

22.まず、トークをされた先生方の人選が大正解だったと思います。金城さんの「勝手に思い、おもしろがり、勝手に生きる力をつける」というお考えは、第一弾でテーマになった「自由な読み」との繋がりということでも考えさせられました。石井先生の「学校って嘘臭くないですか」という問いかけや「実用が本質ではない」という見解は、一般の社会人も心に留めるべき課題だと実感しました。(ライター・エディター)

23.お三方の異なる視点からのお話面白かったです。今回はメインがお話を聞くというスタイルだったと思いますが、残念ながら参加できなかった前回の私達まつり第一回の雰囲気も気になり参加できたら良かったなと感じました。登壇している方の話をみんなで並んでお聞きするのが久しぶりで新鮮でした。話を聞くというのも鈍っているとしんどいものだなと感じました。体力面でももちろんですが、脳をフル回転させて話を聞くのでは無く、「聴く」という意味でも。学生は偉いなと感じました。
　また、最近産まれた子供に対しても頑張れよという気持ちが生まれました。(本校卒業生)

24.不快という感情にネガティブなイメージしかありませんでしたが、人間の本能に働きかける大切な感情であるということを、改めて感じました。気持ち悪さも武器にするという発想が印象的で、不快なものに対する意識が変わりました。(本校保護者)

25.スペシャルトークをされた方の人選がよかったと思います。それぞれ異なる立場、異なる視点からの「ことばの学び」についての知見をお聞きすることができ、私自身、多くの学びを得ました。金城氏は小山先生の授業を受けた経験が今の自分の仕事に生きていることを感じておられ、「学び」について「面白がる」というワードと結び付けて考えておられました。今井先生は、学びの方法論の研究と、多くの教育現場を回られた経験から、小山先生の実践の位置づけをされました。また、山元先生は、文学読解のプロセスの分析のお話が興味深く、また小山先生との以前の共同研究のお話も楽しくお聞きしました。(教職員)

26.御三方それぞれのお話が、自分の今後の生き方の軸の一つになるようなものでした。貴重なお時間をいただき、素晴らしい講演をしていただいたことが本当に嬉しいです。ありがとうございました。(本校卒業生)

27.卒業生です。私が受けた授業の答え合わせや伏線回収をしているようで楽しかったです。
今宮高校には小山先生の他にも地学、書道など担当科目を面白がる先生がいらっしゃいました。私は高校生活に「しこり」があります。痛くないけど、気になる存在です。それは、金城さんのお話にあった「棘」であり、ディスカッションセッションで話題に上がった「非連続性」でもあります。その「しこり」「棘」「非連続性」の正体は、私達が立っている「場所」の定義づけです。私達が立っている場所がどんな場所なのか、私は言葉で表すことができません。授業の中で、ヒントや部分的に答えは教えてもらったと思いますが、明確な定義づけはされなかったと思います。また高校時代にとっての私が想定する「私達」は、今宮高校関係者(生徒・卒業生・教職員・保護

者など)、あるいは日本人、若者でした。
　しかし、今回の「私達まつり」は、今宮高校の生徒だけのものではなく、現職での教職員など、私が想定しない「私達」がいました。「私達まつり」に参加して、ますます「私達」の正体も、「立っている場所」も分からなくなりました。多分これからも「しこり」はとれないと思いますが、私にできることは「しこり」を面白がることかな、と思いました。(本校卒業生)

28.〇金城先生から、漫画を描く際に、論理以前に動物としての快・不快が面白さの土台として存在しているという旨のお話があったがこれはかなり授業作りにも、生徒指導にも参考になる型だと感じた。どうしても、「なぜこれが必要か」という論理を生徒に押し付けてしまいがちではあるが、それ以前に、「なんか面白そう」とか、「なんかモヤモヤするなぁ」とか、「この人の話は聞きたいなぁ」という感覚なしには、生徒には学びが浸透していかない。ロゴスだけではなくパトスも必要といったような、その感覚を教員は忘れてはいけない思った。
〇石井先生のお話に、「すぐれた教育者は棘を残す」という言葉があった。この言葉に感銘を受けると同時に、自分のこれまでの授業を振り返らざるを得なかった。「生徒がスッキリしないことが怖い」という感覚や、「生徒の分かった顔が見たい」という思いを持っていた私は、教えすぎてしまうことが良くあったように思う。2 部で小山先生が「非連続」というお話をしていたが、「なんや、これわからん。気になる。」と思う入口まで生徒を連れてってあげることが教員の大きな役割であると感じた。最近は問い→学びの距離が近いというお話もあったが、生徒も我慢できなくなっているように思う。頭の良さではなく、この問と学びの距離に耐えうる頭の強さを持つ生徒を育成していきたい。(教職員)

29.私の理解力がもっとあればいい！そんな風に悔しく思うほどこの講義がいかに面白くタメになるものであるかが分かって、もっと勉強して分からなかった部分が分かるようになりたい！と思う濃密な時間でした。また人生について、本や言葉を通ずる学びや教養について、改めて自分自身もそこに入りたい！と思いました。(高校生)

30.金城さんの話はおもしろかった。まず不快を呈示しないと読んでくれないと言う指摘はヒット作となった漫画を２，３思い出してみても、確かにそうなっており、さすが現役の鋭い目だと思った。石井先生の話は現場に立って奮闘している教員に、具体的な方法論を示してくれ、勇気を与えてもらった。(教職員)

31.石井先生のお話の中での「他者との関りは基本不快」というお話が印象的でした。
自分と臭いの違うものとの関わりが大切とのことで、公立高校の総合学科での学びはまさにそのものと改めて感じました。(保護者)

32.インプットだけでなくアウトプットも重要であると再確認した。語ること、対話すること、異分野の人と関わり合うことで視野を広げていくことが今後の自己成長にとって大切だと感じた。(一般)

33.むずかしいところもありましたが、とても興味深いためになるお話でした。特に石井先生のお話はとても分かりやすく学びになりました。たまたまとなりに森木乃美さんが座られていてお話できて大変興味深く高校３年間ダンス部で文武両道ですばらしいと思いました。嬉しかったです。息子が卒業しても（息子は授業を取ってなかったのですが）第３弾が開催されたとしたら、私も参加できますでしょうか？（保護者）

34.３名の方の話を聞きながら、自分が好きであった国語・読書と、現場で求められる国語力（能力）とのズレ、違いについて考えてしまいました。あまりにも「問いと答えの距離」が近すぎ、どちらかと言えば「不快感を取り去る教育」に注力してしまっている。きっとこのままでは生徒が大人になった時、「国語で何を学んだのか、それが今どう自分につながっているのか」を感じることはないと。せっかく思考と生活に最も近い“国語”という教科を選んだのだから、より不快に、答えなく、自分の読みと生徒の読みを対等に扱えるような授業、瞬間をもっと作っていけたら。そんな事を考える良き時間でした。ありがとうございました。(教職員)

35.同じ卒業生(私は 10 期生)として金城さんの話には共感と懐かしさで気持ちがわくわくし、喜んでしまいました。さすがエンタメの場にいる方ならではで、楽しくお話し聴きました。
好きな授業を選択していた金城さんとは打って変わって、私は苦手なことに執着し、敢えてそれらを選択して自分に厳しくし、とても濃い青色の春で、苦々しい思い出でもありました。ですが、話を通じて自分を形成した大事な要素でもあり少し大袈裟に言えば愛すべきところでもあるかなと今までとは異なった想いが沸き起こってきました。今になってやっと昇華したのかもしれません。陰極まって陽に転じたようでした。
　石井先生と山元先生の話では、日頃のことばの関わり(読書や会話、英語学習)を振り返るきっかけになりました。真正の学び(ホンモノの学び)は“人間臭くてどろどろとしたもの”“ノイズの高いもの”を通じて行われるということにはすごく納得し、いい言葉だと感動しました。またコレクティブエフカシーを初めて知ったのですが、日頃趣味で複数人数で英会話学習する中で(文学作品とはまた違うかもしれませんが)何かしらのテキストを通じて皆で理解します。その時に毎回感じる楽しさ喜び等の快(たまに不快)というのは、このコレクティブエフカシーを体感しているのだと知り嬉しかったです。

3-②　ディスカッションについて

1. 先生方の質問も勉強になりましたが、高校生の質問には、漫然と授業していてはいけない、と思わされました!(教職員)

2.パネラーの先生方のそれぞれの想いがディスカッションで表現されてて、普段の授業に活かしていきたいと思いました。特にラストで金城さんが言っていた「小山先生が色々な人にトゲを刺し、その人たちがそのまた誰かにトゲを刺し、それぞれのスペシャルな道を作っていく」という言葉が響きました。私は小山先生には絶対なれませんが、授業や人との関わりを通じて私らしい道を作っていきたいと思います。(教職員)

3.古典を読解する上で、必要な最低限の知識を身につけてもらうために、どうしても「受験古典」の授業をしてしまっているところで悩ましく思いました。教員としてまだまだ未熟ではありますが、古典を読み深めるためにも文法事項は押さえておきたいと考えております。いかに読み深める活動へと持っていくか、いかに問いを立てるか、考えながら授業を行っていく所存です。(教職員)

4.テクストを何度も読み返し、言葉に徹底的にこだわり、思考する取組み。併せて、他者とも議論を尽くす取組み。まさに国語のお手本となる実践だと思います。
工夫次第で共通科目でもできると思います。
国語の授業がこんなふうになってほしいと切に願います。
長年に渡る尊い実践を後世に共有いただき、ありがとうございました。(教職員)

5.「飛躍」の話題と「詩を学ぶ意味」の話を興味深く聞きました。それから、最後の若い質問者が投げかけた大きな問題に、先生方が誠実に答えていた姿が、「私達が立っている場所」そのものだと感じました。(教職員)

6.学校で教えることまたは学校で学ぶことの意義を捉える貴重な経験となった。中盤で生徒に面白がられる授業とはという題がでたが、実際に面白いと思う授業では環境が整っていると理解できた。例えば、このようなディスカッションでは対話しやすい雰囲気の中であるからこそ、深い対話が生まれる。すなわち、「対話せざるを得ない環境」であるということだ。これを面白いと思う授業に当てはめると「面白がらざるを得ない環境」でなければならないと感じさせられた。(学生)

7.あと１時間は議論を聞きたいところでした。桝井先生や小山先生にももっとたくさん話してもらいたいと感じました。
中盤で挙手をする人が一気に増えたのが印象的でした。参加する人たちの中で議論が熱を帯びてきて、自分も発言したいという気持ちが湧いてくるような、これぞディスカッションであったなと思います。
こういう場が学校に、そして社会にたくさん溢れることが「豊か」な社会なのではないかと思いました。(教職員)

8.ディスカッションでの質問への小山先生のご回答は、私の中ではある意味「答え合わせ」でした。高校生のときに肌で感じ、卒業後もお話する中で感じる小山先生の授業への姿勢、生徒へ向かう在り方を、私なりに解釈、私バージョンにして学校現場で実践しています。解釈は飛躍してなかったのかな、間違ってなかったななどと考えていました。金城さんもおっしゃっていましたが、今の「これ」は小山先生にしかできないもの、だと思うので、私なりのアレンジ、自分としての実践が重要だなぁとも考えさせられていました。
　ディスカッション全体で最後に話された高３生の言葉も印象的です。あの大人数の中で堂々と

発現されていて素晴らしいと思います。そして登壇されている先生方のお声がけが社会の現状にも触れながらも、心強く温かくて素敵でした。
(本校卒業生)

9.「知っていることを確認する」読みと「知らないことを発見する」読みは非連続で、そこには飛躍があるが、どうやって個々人がその「飛躍」を乗り越えていくか、という質問と、それに対する壇上の先生方のお答えが、それぞれ非常に興味深かったです。(教職員)

10.このイベントを参加されている皆さんご自身の教育に活かそうとしている感じがよくわかりました。(本校保護者)

11.明日も行きたいと思える学校はどのような学校なのか、これからも考え続ける必要があると思います。マニュアルのない世界の中で生徒にどのように向き合うのか共に考えることができよかったです。(教職員)

12.印象に残った言葉「本気で反応しているか」「フッとわいた疑問を言える雰囲気づくり」「種が残る＝主体性の担保」「世の中のドロドロに向き合う中で自分に正直になり、その中で自分に気づく」「勝手に自分で選んだもの＝本物」他、多数あります。(教職員)

13.こんな流れでよいのかな？と、確認なさっていましたが、知りたい内容ばかりでした。日本は、学級づくりと授業がリンクする、とおっしゃっていたのは、本当にその通りで、クラスが明るい雰囲気だと、ペアワークやグループがスムーズです。高校の先生方の悩みをお聞きできて、悩みながら授業を作っておられる姿が真摯だなあと、思いました。(教職員)

14.上記と重なりますが、お三方が自分の分野に引きつけて回答してくださり、面白かったです。私の無茶な質問に山元先生が自作の詩を披露してくださったのには、参りました。昔と変わらない魅力的な先生でした。(教職員)

15.先生方の意見を聞いて勉強になりました。国語教育っていいなぁと思う反面、私は英語教師なので、いかにしてエッセンスを英語の授業に落とし込むかを考えながら聞いていました。なかなか答えは出せませんが、これからじっくりと考えていこうと思います。(教職員)

16.フロアからの質問に対して、登壇者の皆様のコメントがユニークでしたし、それをコーディネートしてくださる桝井先生のコメントがまた味わい深く、気がつけばあっと言う間に終了時刻となっていました。高校生の質問も印象的でした。教室で教え、学ぶことの難しさゆえの魅力を再認識しました。(教職員)

17.ディスカッションでは、現役の先生や高校生の方の悩みや疑問を聞くことができました。

特に高校生の方の話では、そこまで考えている高校生がいるのだと驚き、私もまだまだ考えが甘いのだなと実感しました。(桃山学院教育大学学生)

18.フロアの様々な意見に真摯に向き合ってくださっていて、たいへん勉強になりました。最後の現役高校生の方のご意見と、それに対するお返事が印象的でした。先日別の研修で高校卒業後の出口の話になりました。入試のための授業じゃないと頭で考えつつ、標にはなっていたような気がします。授業頑張ろうと思いました。(教職員)

19.出席できなくて残念でした。(他県高校教職員)

20.最後の高校生の方の意見が素晴らしかったです。真っ直ぐに自身の意見を話される姿勢、大嫌いな学校を変えようとする志にも感銘を受けましたし、我々も彼女の叫びや想いを受け止められる教師であるべきだと想いを新たにしました。(附属天王寺)

21.現在、私も小さな学校で教員をしているのですが、参加者の方の多くが教員の方で、授業や国語教育について質問されている内容に、どれも共感し、こうした悩みを持っているのは自分だけじゃないんだなと少し心強くなりました。そして小山先生はじめ、登壇された皆さんの回答を聞きながら、色々と考えさせられましたし、国語教育を通して子どもたちにどう向き合っていくか、会場の皆さんで試行錯誤しながら考える空気感がとても心地よかったです。(本校卒業生)

22. 会場から、なぜ学習者が関心を持って進んで考え抜こうとする授業になったのか、といった質問があり、興味深く思いました。小山先生が本気で学習者に向きあっていたから、といった答えがあったように思います。それもあるでしょうが、その質問に対して、私は、自己と、それを取り巻く社会を取りあげている「力のある教材」の開発・編成、授業の段階的構造にも関わっていると思いました。また、過去の受講者やゲストの話などもあり、学習者がたえず、刺激を受け学びへの関心とエネルギーを失わなかったことも要因にあると思います。

高校生の質問も、教育の本質的なものであり、切実感があって心惹かれました。

過去の受講者からの発言があり、そこで、学習者の質問をとらえて、小山先生が、それはいい質問だね。」と答えたというエピソードが話されました。このエピソードは、「私達の立っている場所」が、問いの生まれる教室、問いを生む居室であることを表したものと思え、この授業の本質につながると思いました。

質問対する返答が、ぼんやりと長く時間が経過したことは、残念でした。また、会場の参加者に授業の概要を知っていただくための授業構成一覧表（石井先生の資料『真性の学び、授業の深み』の 50・51 頁）が共有されていれば、もっと話が深まったとも思いました。(教職員)

23.桜和高校の学生さんによる生の言葉とそれを受けた金城さんのご発言が、今回のディスカッションに生命を与えたのではないでしょうか。小山先生がスペシャリストだというご意見には、参加された誰もが共感できたのではないかと思います。小山先生、学生の頃から変わらない熱意と

キャラで、いい年月を重ねてこられて立派だと思います。(ライター・エディター)

24.時間的に難しいかもしれないが、もう少し質問者とのラリーがあれば良かったな感じたのが正直な感想です。質問に対して、答える。だけではあまり内容が深掘りされないと感じました。途中で質疑応答の後に石井さんでしょうか？「飛躍」の定義について質問されたと記憶しておりますが、「あ～私達っぽい」とふと感じました。学生時代は先生等の話を聞いている際、疑問に思った事を解消する時間はほぼ無かったです。疑問に思っても、何となくで解釈したり、きっと周りは理解していて自分だけ理解できていないなら流れを停めてしまっては悪いと感じスルーします。でもあの石井さんが質問された際、恐らく会場の皆さんが「あ！そういう意味だったんだ」と感じているのが空気で感じました。私達の授業でもそういった事が繰り返され、クラス全体で読み深まるという作業ができていたんだと思います。共通認識で読み深めた上で、どう感じるかは個人次第という風に授業では終着点になったような・・・

話は長くなりましたが、やはりディスカッションパートの方が楽しかったです！

最後に個人的に心に残ったワードは石井さんが仰った「読めていないという事に気付く。一度その壁を破ったら戻る事はない。」という言葉です。理由は心の底から共感したからです。私達を受講した１番の成果は「読めていないという事に気付き、読もうと意識できるようになったこと」です。

小山先生にもお伝えしましたが、受講中の私は小山先生や周りの受講生の言う事が理解できず、ある日考え込みすぎて学校を休みました。家で時間を潰していると NHK で小学生に読書術を教える番組が流れており、うろ覚えですが「本に出てくる分からない言葉は簡単な言葉に変えて読んではいけないよ、その言葉である事に意味があるんだから」などという事を伝えていました。

私の場合その瞬間、自分は本を読めていなかったんだと心の底から気付けました。どこで、誰から、どの様に気付かされるのか分からないから面白く、人それぞれ違うんだなと思います。ただアンテナを張っておく事は大切だなと振り返ると感じます。(本校卒業生)

25.自他を比べるのが容易な時代になりました。よくも悪くも、それにより、生きづらさをを感じる人が増えてきているように感じます。システムは変えれないけど、小山先生のように、わたしちまつりのになればいい。オンリーワンでいいというメッセージが印象に残りました。(本校保護者)

26.スペシャルトークでそれぞれの方の立場やお考え（お人柄も）が分かった上でのディスカッションだったので、言葉の学びをテーマとしているにも関わらず、とてもリラックスした雰囲気で楽しい場でした。その中でも、印象にのこった言葉や議論があって、スペシャルトーク同様、私にとっての多くの学びがありました。(教職員)

27.ハイレベルすぎてついていくのがやっとでしたが、実際に教育の現場に携わっておられる方や、現役高校生からの意見なども聞くことができ、自分にはない考え方が多く見つかって新たな学びがたくさんありました。第一回と同様に、世代を超えた言葉の力というものを感じる時間になり

ました。(本校卒業生)

28.確かに今は作文よりもポエムの方が書きやすいかもしれないと思った。また、高校の勉強は共通テストに向かっての勉強であり面白みにかけるというのも非常に同感であった。
学級づくりの際に仰られていたことから思いついたが、大学に比べ小中高は教える時間や内容が限られるため掲示物や配布物に授業内では教えられない内容に興味を持たせるようなことを書く、掲示物を読みたくなるように目立たせるなどがいいのかなと思った。
全てを言わずに最後はその人に考えてもらう、気付かせるというのは記憶に残るのも含めて大事だなと思った。(追手門学院大学文学部)

29.小山先生は厳しいかという質問に答えた者です。「私達まつり」が終わってからもう一度、考え直しました。小山先生は授業での生徒の発表や意見に関しては、考えの浅さや甘さを指摘する先生だったと思います。しかし、この答えは今宮高校の校風と切り離すことはできず、校風を知ってもら事も大切だと思うので、私が在籍していた 2000 年代後半の今宮高校の校風と自主規制について書きたいと思います。(今の状況が分からないので過去形にしています)今宮高校は総合学科ということもあり、「厳しさ」ではなく「自主性」「選択と責任」を重視する学校でした。先生たちは、生徒のよくない言動を起こした場合、それを直さないまま大人になる恐ろしさと理想や人物像、つまり私たちがこれからとるべき選択とその理由を話してくれていました。また、今宮高校には校則がありません。校則に相当するものとして自主規制があります。自主規制は私たちの先輩が作り上げたもので、学校から強制されるルールではありません。もし自主規制を破る生徒が現れた場合、教師ではなく生徒が注意すべきであり、自主規制に異議がある場合は生徒たちで変更を決定するよう先生から話がありました。学校全体として、生徒に目を光らせて厳しく指導しようという学校ではなかった、ということをお伝えしたいです。(本校卒業生)

30.最後の高校生の質問(入試ありきの授業にならないためには。)は、教員として常に自問自答すべきことだと思う。やはり、入試から外れる授業をするには勇気がいる。ただ、真正の学びはそこに縛られている限り、実現し切れないものだと思う。
教員が好き勝手できる、出島空間のような授業を作る必要があるという話があったが、常にそういったチャレンジができる教師でありたい。(教職員)

31. 興味深い話を聞けて最初から最後まで楽しかったです。特に私が高校三年間で感じた率直な意見や思いを新しい観点で見ることができて、また世界が広がった気がしました。一度でいいので、高校生の内に小山先生の「私たち」の授業を受けてみたかったなと心底思いました。(高校生)

32.普段いかに質問と答えの距離を近づけて考えていたかよく分かった。このディスカッションにおいて、何を質問しているのか、何を答えているのか、Q&A は成立しているのか？よく分からなかったが、この不快さこそが重要なのだと思った。すぐに答えを得ようとする姿勢を変え、自分なりの考えを掘り下げていきたい。(一般)

33.先生方のご意見を伺えてとても勉強になりました。久しぶりに頭をしっかり使ったように思います。いろいろな高校の先生のご意見もお聞きできてよかったです。
　あと息子は今宮高校といういい高校で学べてよかったなと思いました。（保護者）

34.必要なのは「時間」と「教師側の読みの能力」かと感じます。まずこの授業、方向を取るためにはやっぱり時間が多くいると思います。待つ時間・考える時間・話す時間・また考える時間。そして生徒が出してきた読み・視点よりも高い視点。その先で待っていれるだけの能力が教師側に必要なのでは…と。受験のための力ではなく、１０年、２０年後に答え合わせをするくらいの心構えが教師の側に必要だと思いました。（教職員）

35. 頭の中に形のあやふやな言葉や想いが巡り自分の身体が高揚してました。当時の授業の時と同じ感覚だと懐かしく少し泣きそうになりました。会場がやや熱を帯びかけた時に終わりの時間になったような気がします。あっという間でした。

3-③　ご意見ご感想（現役の高校生へのエールなどどんなことでも）

1.今日はありがとうございました(教職員)

2.小山先生の授業や私達まつりを通じて、言葉の持つ力の重大さを感じました。英語で同じ言語を教える身として、これからの世代にリアルなやり取りの大切さを伝えていきたいと思います。本日はためになるお話をどうもありがとうございました！(教職員)

3.学校設定科目を採用している高校で勤務していますが、これほどの熱量をもって行えるほど自分自身の学びが深められていないと改めて実感しました。「トゲを残せる」先生になれるように頑張ります。（教職員）

4.このような素敵な授業を選択できる皆さんのことを羨ましく思います。
内容は厳しく、挫けそうになることもあるかもしれませんが、この経験が皆さんの一生の財産になると思います。頑張って！(教職員)

5.世界をことばでつかみ、そのことばで人と繋がる。それができれば私達はどこにでも行ける！高校生の皆さん、「私達」とともに面白く生きていきましょう。（教職員）

6.「私達の立っている場所」では個人によってその課題は異なりますが、自分を追求するという意味ではかなり深い題材であると考えます。だからこそ、こうした機会を通して自分自身について問いかけ、他者と一緒になって深めていくということだと感じました。それは、今後の国語教育においての重要な題材の一つであり続け、結論のない課題であると改めて実感いたしました。また、それと同時にこの「私達まつり」の経験を生かしてゆきたい所存でございます。貴重な場所を設けてくださり、感謝申し上げます。（学生）

7.いわゆる「困難校」で授業実践を行った報告は、あまり見つからず、他の学校の先生はどのように授業をされているのか知りたいと思っています。国語科の研究会に参加しても授業崩壊している先生の報告は聞けず、自分の不甲斐なさが辛くなるのであまり参加していませんでした。ただ、今回参加させていただき、来週からの実践を頑張ろうと元気をいただけました。

最後に余談ですが、桝井先生が生野高校におられた際、（1 年だけ？）同僚だった表さやか先生の影響で私は高校の国語科教員になっています（高校 3 年間表先生の現代文の授業を受けました）。表先生が師と慕っている桝井先生のお話を、少しですが聞くことができて嬉しかったです。本日はありがとうございました。（教職員）

8.本日最後に高 3 の生徒が発言した言葉がすごく印象に残っています。しっかりと自分の「語りたいこと」を持っている質問で、これこそ若い世代に大切にして欲しいものだと感じました。「何を言っても無駄」「何かを発言するより、指示された方が楽」と思っている若者が多いのだとしたら、それは大人の責任です。語りたいことがあって、自分の言葉が誰かを変容させ、社会をよりよいものに変えていく力を持っているのだと、そう若者が思える社会を作っていきたい、だから若い皆さんにもたくさん語ってほしいなと思います。（教職員）

9.今回の第二弾は、前回と違って気楽に参加させていただきました(笑)。

今回はどちらかというと、教育に携わる身として、参加している自分がいました。英語教育でも小山エッセンスを取り入れていきたいな、と思います。

現役生の保護者の方とお隣の席になり、お話しできたのも有意義でした。ありがとうございました！（本校卒業生）

10.この授業は、これからの人生の糧となる何時間かだと思います。ぜひ「とっくみあい」を楽しんでほしいです。（教職員）

11.貴重なお話を聞く機会をいただき、ありがとうございました。（本校保護者）

12.小山先生が作り上げてこられた「私達が立っている場所」を中心に集まった方々の教育に対する想い、これからの教育がどうあるべきなのか、たくさんの話を伺い、私も考えることができよかったです。ありがとうございました。（教職員）

13.「指導できる幅を広げる」ことができるよう、「視点」を変えてみます。（教職員）

14.選択と決断は、えらぶ、ということであるが、その後ろに控える覚悟が違うのだ。自分で、えらび、えららだことに納得しているか、が、大事なのだ。まわり道やあしぶみもあるけれど、目標に向かっていれば必ず輝く道になるのだ。教員として、このことは、生徒に繰り返し伝えていきたいと思いました。期限がきたから楽そうな方をえらぶ、のではなく、期限がくるまで、メリットデメリットを比較して悩んでえらぶ、ようにさせたいです。

また、教員はいろいろ工夫してしているけれど、高校 3 年生の発言のように、授業がおもしろくない、授業内容を理解できない、興味がわかない、自分を先生が受け入れてくれていない、自分のことを先生はわかってくれない、と、思っている生徒がいる、ことを心にとめなければならないと思いました。人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に。森信三の言葉が、1 月の神社の言葉でした。

私にとって、今回の土曜の授業はこの機会になりました。ありがとうございました。今後も、お誘いいただければ幸いです。中学校教員でも、教職員対象の講座に出席させてもらえれば尚うれしいです。（教職員）

15.最後の質問者で、オウワ高校の 3 年生さんがおっしゃっていた言葉にハッとさせられました。「共通テストをゴールをした教育から脱することが重要ではないか」確かに。学力、進学に傾きがちな教育現場に彼女だからこその発言だったように思います。石井先生の「答えのない問題に耐える力」、とても響きました。今日はこれからシルヴァスタインの「おおきな木」を抱え、授業に向かいます。ありがとうございました。楽しいまつりでした。（教職員）

16.大勢の熱気でわいた私達まつりに参加し、小山先生、そして大阪の先生方のエネルギーを分けていただいたような気がしました。ありがとうございます。（教職員）

17.文章を読み考えたことを自分の言葉にするという行為は、勇気のいるものだと思います。ですが、そこで勇気を持って相手に伝えることができれば学びは深まります。高校生だからここまでしかできないと決めつけてしまうのではなく、自分を信じて思いや感じたことを言葉にしてみて欲しいと思います。（桃山学院教育大学学生）

18.実は、授業している方も授業でたくさん学びを得ているんだよ、高校生のみなさんと同じ方向を向けてたらいいなと思っています。私達まつりに参加させていただけてよかったです！ありがとうございました。（教職員）

19.おもしろい人を育てる学校、おもしろい人を育てる授業に、これからもおもしろがって参加してください。そんなあなたが、これからの日本を先導し、支えることになります。（他県高校教職員）

20.附属に着任した年に小山先生の授業を拝見させていただき、いきいきと活動する学生さんの姿に感銘を受け、見よう見真似で実践を続けさせていただいています。改めて同実践の意義を、先生とかつて生徒だった方からお聴きして、自身の未熟な授業の課題を見直すことができました。より精進していこうと思います、ありがとうございました。（附属天王寺）

21.とても個人的な感想ですが、十数年ぶりに母校の門をくぐり、何一つ変わっていない校内を歩いて、懐かしさ満載の多目的ホールで今回のイベントに参加できたこと、そして今宮で出会った

友人と肩を並べて参加できたことが、本当に嬉しかったです。石井先生が講演の中で、「いい学校とはどんな学校か」と尋ねられた時、隣にいた友人は「いい友達に出会える学校じゃないか」と言っていましたが、まさに私にとって今宮は大切な友人に出会えた学校なので、今宮を卒業できたことを誇りに思いましたし、改めていい学校だったなと思いました。ちょっと褒めすぎな気もしますが笑 卒業後もこうした関わりがもてる機会をつくってくださってありがとうございました。（本校卒業生）

22.現役の高校生へのエール

「私達の立っている場所」は、今の自分と社会を自分ごととして考えることのできる、すぐれた授業だと思います。生涯にわたる高校生のみなさんの学びの基礎となる、そして生涯にわたって生きる力となる授業だと思います。このような授業を、高校生の皆さんとともに継続していただければと思います。（教職員）

23.聖光学院の先生が問いかけられた、答えを求めがちな理系の生徒が多い進学校で、詩をどう扱えば良いか、詩を国語の授業で取り上げる意義は何かという件に関しては、少し課題を残したのではないでしょうか。リフレイン等はあくまでも一手法だし、そういうことよりも詩の言葉の奥にある深いものについてみんなで考えるのが、私達だと認識しています。定型を含む詩の学びについてのトークやディスカションの機会があれば、ぜひ参加させていただきたいです。充実したひとときをどうもありがとうございました。（ライター・エディター）

24.ネットや AI が溢れて大変な時代だから、本質に向き合うのはとても大変だろうなと思います。自分に誠実に頑張って、楽しんで下さい！（本校卒業生）

25.非連続的に続けるという表現が面白いですね。
相反する言葉の組み合わせが気持ち悪く、まさに不快です。様々な問いにあれこれ考えを整理し向き合うことは根気もいるし、大変なことですが、その問や、答えに共感してくれる仲間がいることは素晴らしいことです。これからも私達まつりを応援しています。ありがとうございました。（本校保護者）

26.生徒の心にトゲを残すこと。学びが「非連続」であること。すなわち、教えたことがそのまま何か有益なものにつながるのではなく、長く心に留まって、後々芽をふいて育っていくこと。すぐに役に立つようなものは浅いこと。これはコスパやタイパという言葉に象徴される「効率主義」全盛の時代において、たいへん重要な示唆があります。小山先生は、これからも生徒の皆さんによきトゲを残し続けていかれるでしょう。「私達」を受講している生徒のみなさんには、授業を楽しみながらそれらを受け止め、数年後、数十年後の成長につなげてほしいと思います。私自身も(国語の授業の場だけでなく)そのような実践のできる教員を常に目指したいと思います。（教職員）

27.「私達」の授業を受けている生徒にも、そうでない生徒にも、言葉を使って社会を生き抜く力が少しでも育つといいなと思います。それは自分の内側からの言葉で考えるということに他ならないと思うので、私自身も小山先生からいただいたこの力を、社会人になる身としてしっかりと育てていきたいと思います。（本校卒業生）

28.日常に溢れる様々な疑問や興味を大切にして欲しいと思う。友人に誘われて参加したが、教員の内側を知ることが出来た気がして参加してよかったと思えた。また、スペシャルトークではなるほどとなることや気付かされたことなど多くの学びがあった。（追手門学院大学文学部）

29.来校しての感想(感じたこと)

今宮高校を卒業して、十数年ぶりに今宮高校に来校しました。在学時と同じように新今宮駅から今宮高校に向かいました。新今宮駅周辺は私の在学時より整備されており、少し寂しさを感じました。私が通学していた時、途中の大阪祭典には毎日誰かの名前が書かれていて、心を痛めることもありました。この「私達まつり」に行く途中も、も誰かの名前が書かれてました。私は安心してしまいました。人が亡くなって安心するなんて不謹慎ですし、道徳的に間違っています。安心した理由を考えると、to be continued...だと思っていたのに別の物語だった、でも、to be continued...を見つけて同じ物語だったと安心した、という心の変化によるものだと思います。人の死を止めることはできません。新今宮は変わっていっても、人の営みという大枠は変わらないのだと私は安心しました。

現役の高校生へのエール

十数年ぶりに校舎の中に入ると、在学当時と変わらず、中庭がありました。変わったのは、私が高校の中庭の存在を忘れていたことです。中庭の存在を思い出してからは、高校生活のいろんな思い出が蘇ってきました。一方で、多目的ホールの中で今何時だろうと左上を見ると、視線の先には時計がありました。体がまだ時計の位置を覚えていました。自分の記憶が不思議でした。

今宮高校での三年間を全部覚えておくことは難しいです。でもふとした時に思い出します。そこで、関連するものを連鎖的に思い出したり、新たな意味や視点を発見することもあります。

高校時代の私はどうせ高校卒業したら忘れるし勉強もせんでええやんと思っていましたし、実際そんなに勉強していませんでした。でも勉強は、教養や日常生活のヒントとなり、日々に彩りを加えてくれるお守りだと大人になってから気付きました。思い出せるものや知っているものが多ければ多いほど、人生は楽しいです。高校生活の中で思い出す材料を蓄えてほしいです。（本校卒業生）

30.感想の送信が遅くなり、大変申し訳ございません。真正の学びという言葉が一つ、キーワードだったように思います。学校と、学校の外を比べて嘘くさい学びにならぬよう、教員として励みたい。そう感じさせてもらった１日でした。今宮高校の先生方、お忙しい中ご準備等ありがとうございました。（教職員）

31. 小山先生、２６年も「私達が立っている場所」を続けられて、ご苦労さまです。１度授業見学に伺いましたが、授業を展開するのに膨大な準備を必要とすると思われ、私には出来ないなと思いました。私も今年７０になりますが、出来る限り教壇に立ちたいと思います。（教職員）

32.現今宮高校２年生の保護者です。カリキュラムの多さ、独自の授業があることで、娘は今宮高校を選びましたが、国公立大を目指すことにしたため、結局は受験を優先した科目選択となり、取りたかった授業が受けられず少し残念です。ブルーロックの大ファンでもあるのに、今日この私達まつりのことも娘は知らなかったです。本当の学びの時間と大学受験のための勉強を限られた高校３年間の時間で両立させるのは難しく、せっかく今宮に来たのにもったいないなあと感じました。大学ではぜひ、今日のような学びの場に多く出会ってほしいと思います。（保護者）

33.非連続性との出会いを大切に。何げない瞬間にこそ、新たな発見　成長はある。（一般）

34.息子（現高３）がなぜこの授業を取らなかったのか…残念です。高校生の今、考えて、意見を言う、聞くという貴重な経験ができる授業だと思います。総合学科ならではの素晴らしい授業だと思いました。ふんわりした生き方も大切だけど、勉強・部活の一生懸命取り組んだ高校生活を楽しんでもらいたいです。（保護者）

35. 母校での私達まつりに参加できて良かったです。知的な空間で帰宅後少し目眩すら感じました。相変わらず私は自分の考えを言葉にするのが遅く、うんうん唸りながら綴り、出てきた言葉と思いとに違和感がないかと何回も推敲します。もやもやしたものを維持しそれらを表す言葉を探すのは苦しくすごく力を要しますが、とっても必要で大切な時間、機会を作って頂いてると思っています。アンケートを書きながら、言語を通じてこれからの人生をより豊かなものにしていこうと明るい前向きな姿勢になりました。

36. 「私達まつり」の、「ことばの教育の定位と挑戦」のテーマから逸れるようで、アンケートに答えられずにいました。時間を置いた今、この機会に高校生へのメッセージとして、伝えられたらと思い直して文章にしています。

第一弾のあいさつ文にあるように、小山先生自身が高校時代の国語の授業を通して「人とともに持つことば」の力をつかみ、教師として今日まで実践を続けてこられました。

大学生の時に、小山先生が読書会をしていたことも述べられていました。それは、学内にとどまらず、他大学の学生にも声をかけて、より広く考えを伝え合おうと積極的に行動されていたことを紹介します。私はその時に読書会に加えてもらった他大学の学生だった一人です。そのご縁から、今回の「私達まつり」に参加させていただきました。

今、高校生の皆さんが、数年後、大学生になった時に、あの頃の大学生だった小山先生のような信念と行動力を持てるでしょうか。その時に知り合った友人と、45 年後も声をかけ合えるつながりを続けられるでしょうか。

座標軸の上では同じ位置に見えても、上昇気流のように周りを巻き込みながら上を目指して高

く伸び続けているのが、「私達まつり」での小山先生の姿だと思いました。会場内に満ちた熱風がそれを物語っていました。

「ことばの教育」を超えて、「どう生きるか」を示したのが、今回の「私達まつり」であったと思います。小山先生の生き方が「私達が立っている場所」のテキストではないでしょうか。高校生の皆さんは、そこから何をつかむのでしょう。

4 「私達まつり」が開催されました　校長ブログ(2024.11.15)

本日、午後から「私達まつり」が開催されました。「私達まつり」は、国語科の小山秀樹先生が本校に着任した翌年度の 2000 年４月に立ち上げた学校設定科目「私達が立っている場所」（錬成現代文）の開講 25 周年を記念して催された「まつり」です。

本日の企画は、５,６時間めに本年度は２講座ある「私達が立っている場所」の授業で、現在高校３年生の生徒たちに、「私達」で同じ教材を学んだ世代の違う３人の卒業生が授業を行うというものです。授業は一般公開とし、小山先生と縁の深い３名の大学の先生をお招きして、後半は研究協議を行いましたところ、40 名を超えるたくさんの方にお集まりいただき、大変有意義な「まつり」になりました。有難うございます。

「私達は今こんな風に考え、生きていますスペシャル」と称して授業をしてくれた卒業生と研究協議会を成り立たせてくださった大学の先生方を紹介します。

【本日の授業者（卒業生）】

１「である」ことと「する」こと　丸山真男に関連して　藤本　藍里さん（76 期〈総合学科 26 期〉京都女子大学法学部１回生）

２「文学のふるさと」　坂口安吾　に関連して

坂井田　暖さん（74 期〈総合学科 24 期〉看護学生で来春から看護師として勤務　実習中につきビデオレター）

3「安楽」への全体主義　藤田省三　に関連して

森　木乃美さん（66 期〈総合学科 16 期〉私立中高一貫校英語教員、奈良女子大学院文学部卒）

【大学の先生方（小山先生との関係）】☆有難うございました！

京都教育大学教育学部特定教授　全国大学国語教育学会理事長　植山　俊宏　様

（25 年間「私達」を見守ってくださった）

関西大学社会学部教授　科学技術史　杉本　舞　様

（小山先生の前任校で小山先生に教わり、大学で森さんを教えられた）

京都大学・関西大学非常勤講師　桝井　英人　様

（小山先生の長年にわたる国語教育の相談相手・本日の研究協議会の司会進行）

卒業生による授業も研究協議も、この場で書き尽くせないほど濃厚で味わい深いものでした。「私達が立っている場所」の「私達」は、ここにいる世代を超えてつながりをもった「私達」の皆であることを否応なく実感させられました。小山先生は、そこには「ことばのチカラ」が作用していることを、この授業を通して生徒たちに体感させようとされているのだと感じました。

25 年間で「私達」を学んだ生徒は 800 名になります。今日配布された記念誌には、彼らの「ことばのチカラ」がぎっしりと詰まっていました。「私達」の学びが、本校を卒業して歳月が経った今も、一人ひとりの生き方に影響を与え、それは、to be continued... これからも続いていくのですね、と小山先生の言葉が印象的でした。皆さま有難うございました。

結びに、小山先生の「ごあいさつ」の文章を掲載します。本日配布された冊子の巻頭言です。「私達が立っている場所」の学びの姿や、今日の「私達まつり」の主題を、より鮮明に感じ取っていただけるのではと思います。

【ごあいさつ】

本日はお忙しいなか、また校務多用の折、平日にもかかわらず多数のみなさんにご来校いただき、本当にありがとうございます。　学校設定科目「私達が立っている場所」を開講して 25 年になります。現代の課題をつかむことばを養い、養ったことばで課題を超えて生き抜く力をつける授業をつくりたいと現在まで取り組んできました。「私達」では、次のような教材を扱います。

1　「である」ことと「する」こと（丸山眞男）＜である＞＜する＞＜価値の蓄積＞
2　ハーバード白熱教室（東大安田講堂編）＜人間の尊厳＞＜自由・自律＞
3　文学のふるさと（坂口安吾）＜ふるさと＞＜大人の仕事＞＜救いがないことが救い＞
4　安楽への全体主義（藤田省三）＜能動的ニヒリズム＞＜喜びという感情の消滅＞
5　歴史としての科学（村上陽一郎）＜対自化＞＜知的冒険＞
6　君たちはどう生きるか（吉野源三郎）＜人間は水の分子＞＜油揚事件＞
7　君たちはどう生きるかスピーチ（受講者）

８　パニック（開高健）＜ネズミの大移動＞＜組織と人間＞
９　主体としての人間のゆくえ（「私達」総集編）＜私達はどう生きるか＞

授業では教材のことばを深く掘り下げ、確かな読みとりをめざしました。学習が進むにつれて教材のことばは、学習する生徒ひとりひとりが持つ自分自身のことばになります。卒業した受講生は、自身の持つことばを今度は仕事や生活にさらされながら、これまで以上に鍛えられたに違いありません。

今回まとめた「私達は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル」には、受講生のこれまでに獲得したことばが満載です。「私達まつり」は、世代を超えて人のことばを聴き、共有し、「うん、よし。」とこれからの自分自身を励ます試み、運動です。

「私達が立っている場所」の受講生は、およそ 800 名を数えます。16 期森木乃美さん、24 期坂井田暖さん、27 期藤本藍里さんの世代の違う 3 人の受講生が、高校生に向けることばは、今日、どのような場面をつくるでしょうか。「私達」の授業を 25 年見守っていただいている植山俊宏先生は、今日もおいでくださいました。かつて私の生徒であった杉本舞さんは、森さんが教わった先生です。違う世代がことばを交わす場面をつくることは、世代を超えたことばの蓄積となり、現在と今後の自身と社会を支え、豊かにすることになると考えます。そうした運動を続けることによって、私は、次の世代のことばの生活に資したいと思います。(2024.11.15)

「私達まつり」第２弾が開催されました　校長ブログ(2025.1.25)

１月 25 日（土）13 時 30 分から多目的ホールにて、本校の３年次国語の学校設定科目「私達が立っている場所」25 周年記念事業「私達まつり」第２弾として、「ことばの教育の定位と挑戦」をテーマにしたスペシャルトークとディスカッションが百数十名の参加者を得て盛大に行われました。

「私達まつり」は、「私達が立っている場所」の授業者である小山秀樹先生が開講 25 周年を記念して企画された、教育実践者として際立った極めて珍しい取組みです。それは、「私達が立っている場所」を受講した約 800 名の卒業生の声を聞き、この授業を通してなされた「ことばの教育」が、今の自分の在り様や生き方にどのように位置づけられているか検証しながら、「ことばの教育」の本質、実践、実際について話し合い、次代への展望について語り合い、挑戦し続ける「熱」を与え合う場をつくるというものです。

何やら企画全体が雑然とした感がありながら、「ことばの教育」の本質的なことばがたくさん飛び出し、気づけば小山先生の期待通りの深い考察が往き来し、大いに実りある会になったと言えます。

第２弾スペシャル・トークの一人めは本校 58 期卒業生（総合学科８期生）で漫画原作者の金城宗幸さんです。金城さんは、「ネット社会になって、さまざまな選択肢が絶えず提示される中で、『勝手に思う自分』を保つことが結構難しくなっているが、自分はこうだと『勝手に思う』ことが重要で、次に、それを『面白がる』こと、そして、それを（ことばや芸術等何らかの）『形にする』ことが大切だ」と仰いました。小山先生の「私達が立っている場所」はその機会をつくって

くれていたと思うとのことです。「こんな機会をつくりながら、いろいろと言ってくる小山先生を『へんな人』だと思っていた。だから小山先生が好きで、それで今日はここへ来ました」とのこと。小山先生を側で見ていた一人として、とてもよく分かる言葉でした。

次に、京都大学の石井英真准教授による「ことばの教育をどう捉えるか―『真正の学び』の視点から―」の表題でお話しくださいました。その内容は学校教育の核心を貫くことばがたくさん詰まっていました。「『いい学校ってどんな学校ですか？』と訊くといろいろな答えが返ってくる。『明日行こうと思える学校』『子どもの姿で勝負している学校』『語りたいものが次々に生まれてくる学校』…」多くの人が全く同感でしょう。人は心が動くと「語る」もの、語りたいことが次々に生まれるには、生徒と向き合う中で心が動かされるようなことが度々起きている証になります。

また、金城さんのことばを受けて、「卒業生に面白い人がいてる学校」もいい学校かどうかを判別する分かりやすい指標になると話されました。そして、「面白い人は『へんな人』に教えてもらうことが多い」と付け加えられると、なんとも穏やかで温かい笑い声が重なりました。

次に、広島大学大学院人間社会科学研究科の山元隆春教授は、「ほんものの学びに夢中になり、互いのかかわりを生み出すことばの教育」の表題でお話しくださいました。山元先生は、小山先生とは大学で国語教育学を専攻する同級生で、卒業してからも当時の学友が集い、例えば「現代詩における〈共同性〉の探究―谷崎俊太郎のばあい―」のテーマで論考を交わし、その考察をまとめたものが、広島大学国語教育会の会誌に掲載されるなど、国語教育についての精力的な探究活動をともに取り組まれてきました。山元先生は、あの頃の活動がそのまま今日の「私達まつり」

に繋がっているようだと話されました。掲載された論考の初めのセクションのタイトルは「読むことの可能性、あるいは私たちは共同で読むことによってどのような彼方へさらに進み得るか！？」と書かれていました。これは、「私達が立っている場所」の主題そのもののように思いました。小山先生は、学生の頃からずっと同じテーマをひたすらに追究し続けられているのです。

また、山元先生は、文学的理解について、①解釈の衝動、②個人化の衝動、③喜びを味わおうとする衝動の観点別に解析し、今宮で「私達」が果たしてきたことばの教育が、それぞれにおいてどのように作用していたかについて話されました。「解釈の衝動」とは、自分のことばで作品を理解しようとする心の動きです。読む者はその心の動きをもとに、自分自身の生活に重ねようとする「個人化の衝動」を起こします。それは、作品を自身の深い部分で位置づけ、その作品とともに生きようとする「喜びを味わおうとする衝動」を生み、読む者はその作品とともに豊かに生きることができる、ということです。

休憩を挟んで、前回同様、京都大学･関西大学非常勤講師の桝井英人氏のコーディネートでギャラリーの方々も巻き込んでディスカッションが行われました。今回もまたとても面白いディスカッションになりました。始まる直前まで、このディスカッションがどこへ向かっていくのか誰も分からなかったのではないかと思われましたが、結局は「私達が立っている場所」が取り組んできた「ことばの教育」、あるいは学校教育そのものに関わる本質的な質問が数多くなされ、とても有意義な会になりました。

これも小山先生の計算どおりとすれば、畏敬の念を持たざるを得ません。「私達まつり」は、参加した誰もが満足するものになったと感じました。だから「まつり」であり、「まつり」であるからには、これからも続くものであるというメッセージが込められているのだと理解しました。

小山先生、金城さん、石井先生、山元先生、桝井先生、そして、本日参加された皆さま、まことに有難うございました。

5 ＜実践報告＞
国語教室の本質――「私達が立っている場所」を参考に

関西大学非常勤講師　桝井英人

（関西大学 教育支援センター年報 2024　所収）

大阪府立今宮高等学校（総合学科）に「私達が立っている場所」という国語の学校設定科目があります（担当小山秀樹教諭）。2024 年度、開講 25 年を迎え、2024 年 11 月と 2025 年１月の２回、実践を振り返る研究会（「私達祭り」）が催されました。私もコーディネーターとして参加しました。この授業（以下、「私達」と略記）を紹介しつつ、国語教室とは何を学ぶ場なのかについて、改めて考えてみたいと思います。いくつかの観点を取り出し、これから教師を目指す人たち、そして、すでに現場で格闘している先生方に生かせる形でことばにしてみたいと思います。かつての受講生の声を集約した冊子や 11 月の研究会での協議の記録などを主に参照します。

１　「私達が立っている場所」とはどのような授業か

「私達」は３年生の選択科目です。主に現代文の評論教材を使い、教材のことばを深く掘り下げ、確かな読みとりを目指す中で、教材のことばが、学習者自身のことばに進化していくように構想されています。扱われてきた教材の例は「「である」ことと「する」こと（丸山眞男）」「文学のふるさと（坂口安吾）」「「安楽」への全体主義（藤田省三）」「歴史としての科学（村上陽一郎）」「君たちはどう生きるか（吉野源三郎）」など。

授業の大きな山場はグループ発表です。発表のためには、かなりの時間と労力を必要とします。ある卒業生はこう言っています。

「『あるトピックについて、グループで一心に読み解き、自分では思い至らない意見を知り、議論して理解を共有し、伝えたいことを伝えられるよう資料を纏めて発表する』

〈私達〉の授業で学んだノウハウは、今でも大学の演習や発表において通底していると思います。グループでテーマについて深く考えて真剣に取り組む姿勢は、…社会の人間関係においても意識できることだとわかってきました。今回の機会に顧みて、〈私達〉の授業が今の自分への自己拡張にこうも広く影響しているのかと我ながら驚きました。」［１］

「みんなで読み解き、考え、ことばを練り上げる過程で、お互いの言葉の中に今の自分に気づき、次の自分をつくっていく新たなことばを獲得する」――この授業の意図を卒業生は的確に捉えていることがわかります。この授業の構想はどこから来たのか。小山教諭が冊子の巻頭に掲げた文章を紹介します。

「私達が立っている場所」の授業を振り返ることばを募集したところ、多数の受講者のみなさんから返信をいただきました。そのどのことばにも高校時代を始まりとしたひとりひとりの生活史が語られていました。…

みなさんの文章に触発されて、「私達が立っている場所」という授業について私自身の生活史をまじえて少し書きたいと思います。10 代の私は本ばかり読んでいました。人間と社会、自分自身をどうとらえたらよいのか見当がつかず、悩み、考えていくつかの小説めいたものを書いたりもしました。そんな私を救ったのは、高校時代の尾谷誠基先生の国語の授業でした。先生は文学作品を共同で読み進める演習授業を通して、人とともに持つことばの凄みを私に教えてくださいました。私ひとりのことばから、人とともに持つことばへ。つづく大学時代は読書会、文学雑誌の発行、映画づくりと、人とともに活動し、さらに私のことばは開かれていきました。

そんな私が国語の教員となり、次世代に生きる人のことばを鍛えることを職業とするのは、自然であったかもしれません。「次世代とともに生きることばを紡ぐ」という論理は、それが困難な状況のなかでどう可能かという生き方の問題となりました。「論理は終わった。あとは運動として生きるだけだ。」と大学時代の友人に宣言して私の大阪での教員生活は始まりました。

４つの学校を経験しました。ことばは人間の性質、資質、成育の過程などからさまざまにあらわされます。私は、獲得したことばを蓄積してよりよく生きてほしいという願いをもとに、特別な場面をつくってことばを共有することを常にこころがけて授業を続けました。国語には、単元的な学習という深い蓄積があります。名のある、また身近な先輩方の実践の場面と指導のことばに大きく勇気づけられたことは言うまでもありません。つたない実践のなかから、「私達が帰っていく場所」「私達が立っている場所」「私達がつくっていく場所」という単元の着想を得ました。たしか 35 歳の時だったと思います。「帰っていく場所」は、主に古典を教材にしながら自身の根拠を見つめる授業です。「立っている場所」では社会の課題を明示し、どう生きるかを考えます。「つくっていく場所」は、今後の自身を構想し、ことばにする学習です。これらの３つの単元を通して、若い学習者のことばを鍛え、次世代とともに私も救われ、豊かに生きることにつなげたいと考えました。なかでも「私達が立っている場所」は、３つの中心ともなる単元で、今宮高校で国語科学校設定科目として受講者とともに育ち、25 年を迎えました。

みなさんからの文章をまとめた今回のデジタルブックをみなさんがお互いに読み進めること、広く世代を超えて読んでもらうことは、みなさんがこの時代を悩み、考えて懸命に生きたこと、人とともに生きたことの証しとなります。自分が考えていたことは誰もが考えていたことだった。しかし、(あるいはそれだから)誰もが考えていたことに自分がたどりつき、自分のことばとして話し出したことは、自分にとって、またそれに耳を傾ける人にとってかけがえのないことだった。「私」が「私達」になり、「私達」のなかに「私」を見いだす経験が「私達」の社会を構想する起点となります。そのことばと、そのことばを生み出す場面をつくりつづける運動を通して、私は次の世代のことばの生活に資したいと思います。(小山秀樹)」［１］

自分とは何か、この社会でどう生きていけばいいのか、そんな悩みの中で、国語の授業に触れ、自分一人に閉じたことばではない、「人とともに持つことばの凄み」を知る。それはことばが希望を開きうることを知る経験だった。そんなことばはどのようにしたら獲得できるのか。獲得の継続のためにはどのような場が必要なのか。この問いとその後の経験がこの授業の着想の根となっています。着想は、切実な自発性・内発性に基づくものであって、制度的に与えられた枠組みや目標に出発点があるのではありません。

小山氏も触れていますが、この自発性・内発性を基点とすることばの学びとは、国語教育における「単元的な学習」の本質です。それは、特定の〈方法〉を意味するものではなく、学び手の現実から出発する学びを意味します。例えば大村はまは、敗戦後、自分の反省と子どもたちの実態（そして社会状況）から、後に単元学習と呼ばれる実践を開始しました。「私達」の授業もまた、国語科単元学習の流れに位置づけられると思われますが、やはり、授業者の現実と次世代の現実が接続してスパークする場所から考えられたものです。「若い学習者のことばを鍛え、次世代とともに私も救われ、豊かに生きる」という小山氏のことばは、「新しい時代がひらけてくることに、身を捨てて夢中で何かをしたかったのです」、「自分を自分で不幸せにしない人にしないといけない」、「力一杯に学んだ人たちに恵まれる平安が必ずある」といった大村はまのことばと重なります。

自分を解放し、進化させてくれることばは他者のいる場の中でしか生まれない――これは普遍的な主題だと思われます。そして、ここにはもう一つ、テキストという他者が媒介する。教材と向き合う学び手たちが、そこから触発された自分たちのことばを新たなテキストとして交換し合う――これは「国語教室」という場のシンプルで本質的な構図です。この過程を通じて期待されているのは、それぞれのことばの神経が賦活し、それぞれの生活に影響を及ぼす気づきがもたらされること。

しかし、国語教師としての課題は、「それが困難な状況のなかで授業はどうすれば可能なのか」――どのようにしてそのような場を作っていくのか、というところにありました。

２　卒業生たちのことば

「私達」の場を具体的に知るために、かつての受講生たちのことばをいくつか紹介します（一部編集、傍点は引用者）。何が彼らに残されたかを知る貴重な資料です。［１］

（教材の内容が生きている）

「…丸山真男氏の「制度の自己目的化」は卒業後も何度も思い出した言葉であった。社会情勢を捉える中で、或いは、社会人として組織で働く中で「制度の自己目的化」に遭遇することは何度もあったように思う。…慢性的な「する」は「である」の質を劣化させ、本来の「である」たり得ないという、そのような意味での「制度の自己目的化」が生じているように私は思う。…職場では毎年様々な研修が多くの時間を割いて行われるが、その中身について一体何人が、〈実践〉し、〈現場に活かす〉ことができているのだろう。ここでもまた「することに意義がある」「していることで論が立つ」という風潮が拭えない。…自身の在り方としてどのように生きているのかと問われれば、自分の歩みを顧みて恥ずかしさを感じずにいられない。しかし、「である」ことと「する」ことは、生活の様々な場面の中でふと心の引き出しから取り出

し、考える視点を与えてくれる教材となっている。「権利の上に眠る者」でなく、実態のない制度を「する」ことで保ち続ける者でもなく、…「私の立っている場所」を問い続けながら歩んで行く者でありたいと願う。」

では、そのように深く「心の引き出し」にことばを定着させるために、どのような学びの形が実践されていたのでしょうか。例えば「制度の自己目的化」とは何かについて、先生がわかりやすく説明していたのでしょうか。もちろんそうではありません。

（素手で考える）

「…ものごとを学ぶ意欲や姿勢に繋がっていると感じます。「私達が立っている場所」の授業をふと思い出すことがあります。思い出すのはニヤニヤした顔で問いかける小山先生、そしてなかなか考えがまとまらず答えられない悔しさです。何々を学んだ、これこれを教えてもらったということはあまり覚えておらず、…思えばＱ＆Ａも全然すっきりいったことはありませんでした。…では私にとって「私達」の何が難しかったかというと、答えを与えてもらうことなく、徹底して自分で考えることを求められたことだったと思います。あれほど自分で考えることを求められた経験はそれまでありませんでした。またそれを人に伝わる形で言葉にすることも必要とされていました。

それに比べると受験問題の設問は答えが用意されたものであり、ガイドのある登山道のようなもので多少険しくても丁寧に取り組めば何とでもなるという安心感がありました。登山の比喩を用いて「私達」の授業での体験を表現すると、進むべき頂上は示されても、足場の固さもメルクマークにすべきものもわからず、ひとたび天候が変わると自分がどこに立っているのかもわからなくなり、たちまち遭難してしまうような感覚でした。今見れば小山先生はいろいろなヒントを示してくれていたのかもしれませんが、その当時の私は、自分で考え言葉にして生きていくために必要な体力も装備も知識も不十分だったのだろうと思います。なかなか達成感を得られることはありませんでしたが、それでも「私達」の授業は知的な興奮を伴う、歯応えのある体験だったと感じます。

卒業してから 10 年以上経過しましたが、「私達」での体験を改めて振り返ってみるとあの授業での体験が〈知ろうとすること〉、〈自分で考えようとすること〉という姿勢に繋がっているように思います。」

その「自分で考えようとする」という「学ぶ意欲や姿勢」の中身をさらに詳しく伝えてくれる証言を次に引用します。それは、高校時代の経験の種がその後の生活の中で発芽し根を張っていくさまを教えてくれます。

（私達が立っている場所について理解し、不断に問い直す）

「…「私達」の学びが卒業後に生きた点について「具体的」に答えるのは困難です。なぜなら、「私達」が生きるのはわかりやすい具体的な場面や瞬間ではなく、日常に溶け込んだ考え方、生き方そのものだと感じるからです。言い換えれば、「私達」の授業の学びは私にとって、今の価値観や考え方の基盤を作る授業であったのだと思います。

在学中は、「私達」について、かなり単純に、活気があって面白く楽しい授業だと思っていました。今になって思えば、当時は授業を受けることで、「対象テクストを深く理解する力」を得ることができる／できたと思っていたように思います。それはある面では確かにそうなのですが、今になって思えば一面的なものの見方でした。卒業して十年以上経った今、私があの授業で身に着けた力は「学ぶ動機」そのものであったのかもしれないと思っています。

在学中、先生が何度もおっしゃっていた言葉があります。「本当にそうか？」。当時私はその言葉を、対象テクストの内容をより正しく理解するための不断の問い直しのための言葉だと理解していました。つまり、当時の私は、テクストを読むにあたって正しい正解がある、正しい理解の方法があると信じていたのです。「本当にそうか？」は、私たち自身が対象テクストを読む際に常に頭に置いておくことで間違いを防ぐための言葉であると考えていました。

しかし、おそらくそうではない。重要なのは、問いそのものを検討する力でした。もちろん在学当時から、物事に対して批判的なまなざしを確保することは重要だということは学んできました。扱う評論やエッセイ、小説はどれも、既存の価値観や社会構造に対して「本当にそうか？」を問いかけるようなものでしたから。しかし当時はあくまで、批判的な視点は評論などのテクストから与えられるものだった。対象テクストの影響圏内、あるいは授業で与えられる情報の範囲内で物事を考える癖がついていたように思います。

そのことに気が付いたのは、大学に入ってしばらくしてから、丸山真男の「「である」ことと「する」「こと」を読み直した時です。ほとんど完璧に理解しているだろうと思ったあの文章に対して、私は不意に疑問を抱きました。「本当にそうか？」と。丸山は民主主義の重要性を近代化と紐づけて語るけれども、近代化が帝国主義と植民地主義、ひいては資本主義の名のもとに非西洋を侵略したことを考えると、民主主義を近代と単純に結びつけて考えるのは危ういのではないか。その論理こそが「近代化≒啓蒙」の名の下に日本を侵略戦争に向かわせたものだったのではないか。

丸山が間違っているとは思いません。でも同時に、丸山だけを読んで考えることの危うさにも気づきました。そこでようやく、私は「本当にそうか？」の真価、この言葉の射程範囲の広さを理解したのです。私たちは、自分たちの価値観や認識枠組みがどのように構築されているのかを理解するために、今自分の価値観を構成しているものを問い直し続けなければいけない。「本当にそうか？」と、自分に向けて言い続けなければいけない。

「「である」ことと「する」こと」に対する疑問自体は、私が大学の授業で別の価値観や知識を学んだからこそ出てきたものではありますが、その種子は、まぎれもなく「私達」の授業で手に入れたものです。授業で私たちは「学ぶ」ことを要請され続けました。「教えてもらう」のではなく「学ぶ」ことです。「学ぶ」とは、先生から、あるいは対象テクストから、「教えてもらう」ことではなかった。何かを理解するために調べること、必要な情報を探し当てること、相対する価値観や概念と比較検討すること、その価値観や概念が出てきた背景を踏まえた上で向き合うこと、そして他者と語り合うこと。そうしなければ、クラスメイトに向けて発表できるまでの理解に辿り着くのは困難でした。そしてその作業こそが「学ぶ」ために必須の行程だったのだと思います。

当時はこうした「学ぶ」作業を、答えに辿り着くための作業だと考えていましたが、今なら「考える」ための作業であったことがわかります。何かを考えるというのは途方もない作業です。意識しなければ無意識に、思考は既存の価値観によって方向づけられてしまうからです。そこには、偏見や差別も紛れ込みます。だから、学ぶ必要があったんですね。自分たちの価値観や考えを、そうとは知られず形作っているものが何なのか、その背景となっている歴史や、価値観や、思想や、文化について知る必要があった。私たちの考え方は、たとえ評論家や作家であったとしても、時代や文化という立ち位置を抜きにしては醸成されません。私たちは、私達の立っている場所を知らなければ、何も考えることなんてできなかった。

この文章を書いていて気付きました。「私達が立っている場所」という授業名は、「現代文」が単に文章を理解する力の養成のための教科ではなく、私達が立っている場所について理解し、不断に問い直すための力=思考力を提供する教科であるからこその命名だったのかもしれないな、と。間違えていたらすみません。けれど、少なくとも私にとって、「私達」はそういう授業でした。

そして、このように文章にしてみて、「私達が立っている場所」が遅効性の種子のようなものであることが、改めてよくわかりました。当時はわからなかったことが、じわじわと根を張るように私の中で広がっていき、気付けば日常生活においてのものの見方や認識枠組みを変えてしまっている。 やはり「私達」での学びは、日常に溶け込んで常に生きているのだと思います。」

「本当にそうか？」という先生の声を、筆者が言っていることは君の読み取ったことで合っているのか？と問い直すためのことばだと思っていた。しかし、今は、「そう読んだ君のものの見方は本当にそれでいいのか？　君の時代や生活の中でそれでいいと思っているだけではないのか？」――君は、私たちは、どんな場所に立っているのか、そう問い直す声に聞こえてくるというのです。

ここには、筆者のことばを自分たちが理解できる別のことばに〈翻訳〉するといった水平な言語処理に使う筋肉とは別の部分が働いています。自分の身体を貫いて、足元から地面に広がっていくような垂直に働くことばの機能です。あるいは逆に、垂直に上昇し、世界を見渡そうとする思考のベクトルです。

そして、そのようにして獲得した「不断に問い直す」という思考のエンジンは、血肉となってからだに溶け込んでいる。そしておそらく不断に更新されていく。

この、ものの見方が更新されていく経験の原型が、「私達」の授業の中に組み込まれているさまも観察できます。それは、友だちが自分とは異なった見え方をしていることに気づく経験、さらに異なりがすりあわされて、お互いがそれまでにはなかった考えに至る経験の中に現れます。

（場が誘発する学びと関係）

「私は、「私達」を受講していた友人と 10 年以上文通をしています。高校時代は別々の友人と過ごしていることが多く、卒業後こんなに長く彼女と関係が続くなんて考えたこともありませんでした。…彼女とは、「私達」と三年生の数学を一年間一緒に受講したぐらいしか接点がな

かったにも関わらず、卒業する日に私の方から文通を誘い、大学四年間を終えて社会人になってからも文通が続いています。彼女とは、なにか趣味で共通点があるだとか、クラブが一緒であったとか、そういったことはありませんでした。…授業で「文学のふるさと」について彼女と語り合った場面を今でも覚えています。どんな会話をしたのかまでは思い出せませんが、分からない表現について共に頭を悩ませ、ああだこうだと言い合い、話し合う中で、自分の中になにか解釈がはまった感じがしました。「ああ、こういう意味だろうか」という「はまる感じ」を彼女と共有した、と私は思っています。その経験が、彼女と文通を続けさせているのではないかと思います。」

テキストの難解な表現に向き合い、たまたま共に学んだ他者と「はまる感じ」――その瞬間を共有した。これは彼らにとって、ことばの神経が震え、何かにつながった更新の瞬間であったことでしょう。

「自分で考えよう」という意欲や姿勢は、そんな他者との〈成功感覚〉が醸成するのでしょう。そして、それは関係―場を作ることへの意欲にもつながっていると思われます。

学び手自身が場を形成する力を得ていくことは、国語教室の目標の一つですが、そのための初期設定は教師の仕事です。「私達」における先生像について二つの証言を紹介します。

（学び手の可能性を信頼する）

「…改めて今回動画で小山先生の授業を見て、高校生が享受する内容としてはとてもリッチなものだと思いました。またそれは小山先生が生徒の知性や可能性を侮ることなく取り組まれている仕事の結果なのだと思います。そうした授業を生徒のときに体験できたことは幸福なことであったと、改めて振り返り感じています。」

可能性への信頼は教師を支える基礎的・本質的な資質ですが、現実にはそれを見失う例にも出会います。年齢やいわゆる〈偏差値〉に基づく「こんなことは彼らには理解できない」といった先入観が教師を支配する。教師を目指す大学生の中にも、〈レベル〉ということを必要以上に意識する人がありますが、そのときにイメージされているのは「一人で設問を解く」といった試験のイメージです。

しかし、「私達」の証言に学べば、「他者と共に考える」「問いそのものを考える」「現実・生活とつなぐ」ことによって、遠くにあるように見えたテキストは、がんばれば手の届く領域に位置を移す。そのとき先生は背後から「伸ばせば手は届くぞ」というメッセージを放射していたことがわかる。薪に少しずつ火がついていくように、モチベーションは高まっていきます。

そしてもう一つ、「教室」には場の力が働く。これもまた「一人で設問を解く」ことでは得られない学びを生みます。具体的には、グループ発表という場の設定です。

（場の力、指導者という重し）

「…教材そのものから得られた知識のみならず、グループ発表の準備に際して、「膨大な量の課題に限られた時間内で取り組む」という状況を捉えて小山先生がおっしゃった「今回皆さんが取る問題解決の手段(課題から逃避するか、どこか無理をしてでも時間を確保して取り組むか、効率的に適度に万事に力を抜いて取り組むか等)を、皆さんは今後の人生においても問題解

決の手段として選択することになります」というお話がとても印象に残っております。これは、人間性の本質を教えて頂いた言葉であり、その後の激務の日々等に思い返しておりました。」

今、真摯に力を尽くすかどうかが人生を決める――この予言めいたことばは一種の〈劇薬〉でしょうが、医師がある場合にそれを選択するように、対象とタイミングを見極めてそのことばを選択することは、プロの教師にしかできないことです。

教師は、ことばや態度をその場に応じて選択し、変化させています。あるときはまったく逆に見える方便を採択することもあるでしょう。しかし、どのような場を保ち、どのような学びを成立させるか、という針路はゆるぎない。この、大きな、ゆるぎないものに包まれているという感覚が国語教室を成立させ、その磁場がことばと思考を生み出します。

３　研究協議から取り出された課題

「私達祭り」と題された 25 周年記念の研究会の第一弾は、年齢の異なる卒業生三人による現役生への授業の参観と研究協議という形で行われました。一人は教員（英語）ですが、後の二人は学生です。それぞれがかつて学んだ「「である」ことと「する」こと」、「文学のふるさと」、「「安楽」への全体主義」について、改めて読み取ったことを今の自分の問題とつなぎ、将来についていろんな思いを持っているであろう高校生達に伝えたいこととして授業を展開しました。現役生たちは、自分たちが格闘している同じテキストについての深い掘り下げに驚いたり、それぞれのテキストの間につながりがあることに気付いたり、自分の経験とテキストをつなぐ読みの実例に心打たれたりしていました。

その授業や現役生の感想にも見え隠れしている国語教室の本質的な課題が、その後の研究協議ではダイレクトに取り上げられました。それらは先の、卒業生たちのことばとして取り上げた内容と重なってきます。

話題になったいくつかの観点を取り上げ、研究協議でのやりとりも交えて、今後の国語教室に生かせるポイントを取り出してみたいと思います。

（１）教育成果は後にわかる

卒業生のコメントの中に「遅効性の種子」ということばがありました。大村はまは「私たち（教師）は完成品を見ることはできないのです」と言いましたが、これは国語教室の営みを実践するときの視野の問題、いわゆる「評価」の問題です。実践者の立場から考えて、これは決定的に重要な観点だと思われます。研究協議の記録から引用します。［２］

（種まきという課題）

（現役教員）最近は、目に見えて効果が分かるものばかりが評価される傾向にあります。見えないものを計ることへの軽視を僕は憂慮しているのですが、今日思ったのは、文章を読むことにどういう意味があるかというのは、現時点では計れない。それが後になって分かってくるのかなと。こんな効果があるよと、今は言えなくても、文章を読み込む意味はあるのだろうと改めて思いました。

（小山）卒業生のアンケート集の中には、よくそこまで考えているなと驚かされることばがあるんです。それが、高校時代にはおよそそれを書くような授業態度や取り組みにはほど遠かった生徒なんですよ。だから、ばら撒きでいいと思います。種をばら撒いといたら、いつか自分で咲かせてくれるということが、かなりの確率で起きます。その時々の状況に負けないで、撒き続けることが必要なんじゃないかなと思っています。

これは多くの実践者が実感していることでしょう。「かなりの確率で起きる」という証言をこれから実践を開始する人たちには覚えていてほしい。そして、「その時々の状況に負けないで」という部分にも留意してほしい。短期の結果として、例えば、単位認定・入試結果・授業評価といった課題があります。これらも重要な課題ですが、どれも教育システムに一時的に組み込まれた手段にすぎない。このようなものはいくらでも湧いてくるし、変化し、消えていきます。教室を構想するときに実践者が見据えるべきなのは、日々の営みがどこまで遠く届くか、という視野です。小山氏の巻頭言の中に次の言葉がありました。

「「私」が「私達」になり、「私達」のなかに「私」を見いだす経験が「私達」の社会を構想する起点となります。そのことばと、そのことばを生み出す場面をつくりつづける運動を通して、私は次の世代のことばの生活に資したいと思います。」

みんなの中で〈私〉を見つけた、そのことばの力が、〈社会〉を構成するときのことばとなる（べきだ)、というこの表現は、〈種まき〉から育つべき森の姿をあらわしています。

（２）場をどう形成するか

では、種を播く、その〈場〉はどのように作っていけばいいのでしょうか。「私達」のような授業は総合学科の選択科目といった条件の中でしか作れないのではないか。40 人規模の必修授業を担当する教員はそう感じるかもしれません。その通り、一般の教室は制度的にすでに設定されたものであり、生徒たちのモチベーションもバラバラです。

協議の中でも〈場〉をめぐる話題は断片的に出てきました。結果として、「私達」はことばを目一杯使う「特別な場」としての成功モデルです。それでも、25 年の間には変化があり、今も試行錯誤は続いていると小山氏は言っています。要約して示します。

「高校生の考えることに大きな違いはない。しかし、人間関係のつくり方（班の作り方、班の中のやり取りの仕方）には変化がある。また、指導の仕方も、かつては「浅い」の一言で済ませたが、今は「浅い」で切ることはない。その時代の高校生に合わせて変化しないといけないが、できたりできなかったり、苦労は尽きない。でもそれが楽しい。」［２］

同じ設定の教室でも変化はあり、方法は変わる。ましてや一般の教室は毎年指導者も含めた全員が新たなメンバーでスタートします。

どうすればいいのか。少し「私達」を離れ、国語教室で必要な〈場〉づくりの課題の基本について触れます。

次は私（桝井）の高校現場での実践例です［４］。一般教室での小規模な「私達」と思ってください。「安心」がキーワードです。

（「私達」を少し離れて――安心して内語を出せる場）

１　問う　ポイント＝自分たちで問いを見つける

（授業例）「羅生門」に問いかけ、問いを見つけ、班で問いを選択し、班で考え、書き、発表し合う。
（ねらい）何かを読むときに浮かんでは消えていく〈内語〉としての問いを、立ち止まって捉え、共有し、テキストに問いかけ合うことで、深い気づきを得る経験をする。
（結果）生徒の感想例
・「本を読んでいて浮かぶ、いつもならスルーするような疑問に焦点を当てて読むのは面白い。」・「今回自分たちで作った問いには明確な答えがなかったので、自由に議論することができて、本当に楽しかった。」・「羅生門は、作者の意見や気持ちを読み取る物語ではなく、読者が考え、作る物語だった。」・「自分一人では気づくことのできなかった話の核心や作者が投げかけている問いなどに、他の人の意見を見聞きすることで気づかされることも多かったので、面白かった。」・「点がつながって線になり、面になり、立体として物語が立ち上がってくる感覚があって面白かった。」・「僕は国語があまり得意ではなく、人物の心情や情景がなにを表しているかなんてまったくわからなかったが、羅生門ではけっこう理解できた。」・「今まで、〈物語を読み、自分たちで問いをつくり、その問いに対する答えを議論する〉ということをしたことがなくて、今回初めてそのような感じで物語を読んだが、今までよりも深く内容を理解することができた。」

高校現場で試みた「心の中に湧いた些細な問いを口に出す」という導入方法には、大きな効果がありました。同僚も試み、やはり効果を実感していました。この高校一年生での経験がその後の授業にも生き、発言しやすい教室が作られていきました。些細な問いの発露経験が、やがて「私達」のような強い問いをめぐる議論にもつながっていきます。

（泡立つ内語を待つ）

「本文に向かう。私たちは文字を目にしたとき、内部でめまぐるしく反応し、何らかの情報処理を開始します。しかしそれは言葉以前の何かであって、目にする文字列が進むにつれ、既成の枠組みを当てはめたり、情報を統合したりしつつ、安定した理解を求めていきます。「ツッコミ読み」では、そのとき、内語として泡立つ疑問や驚きや推測や、そのさまざまなものを素直に「出す」ことを求めます。「この漢字なんて読むの？」といったものでいい。まず「安心」して、素朴な内語を口にしていい場を作ること。教師は、ぼそっとした言葉が自発的に出てくるのを待ちます。参加者は、たった一文二文の中にも自分がいろんな「？」や「！」を思い浮かべていることに気づく。誰かの発言を聞き、「たしかにそこも謎だ」と気づく。この気づきの玉が転がり出したらしめたものです。」［５］

これは私が具体的に描いてみた活動の様子です。大学で教科教育法を担当する際にも、教材研究の演習としてこの方法を導入に使っています。議論できる場を作らなければいけないのは大学でも同じことです。学生の感想例を引用しておきます。

（安心できる空気を作ること）最後の授業で、「教室の空気が作られていった」ということを先生がおっしゃっていました。「空気を読む」ことばかりしてきた私にとって、「空気を作る」という言葉はとても新鮮でした。学校から与えられた空気に染まり、自分もその空気を吸って上

手に生きていくことはとても苦しかったことを思い出しました。高校時代、「勉強ができない」私は、自分の言葉や意見を発表したことはほとんどなかったと思います。けれど、この授業は違いました。「待ち伏せ」（教材名）から始まった、「誰も馬鹿にせず、話を聞いてくれる空気」。それが、この授業で私が一番に感じたものです。ここでの「空気」はとても安心できて、自分の気持ちや考えが、すうっと言葉になりました。それはみんな同じだったのではないかと思います。「勉強ができない」自分を忘れられる時間でした。この授業に出会えて私はとても嬉しかったです。［５］

（３）経験と結びつくかどうか

再び、「私達」をめぐる協議に戻ります。生徒には、教材の抽象的な議論を「自分とは関係ない」と遠ざけてしまう傾向があります。どうすればいいのか。

（実生活とのつながり）

（大学教員）大学生を指導していると、実生活とつながりにくい抽象的・理論的な内容を理解の外に追いやろうという学生が少なからずいます。哲学や思想の難しい内容は、実生活とはかけ離れていて理解しづらいときもあるわけです。そういう内容をどう取り扱っていけばよいのか。

（小山）生活との結びつきは、「ことばを共有することによって、個人ではなく複数になれるように」ということになります。…今自分たちは生きているんだ、あるいは力を得ているんだ、…前向きな気持ちを…創り出していくんだ、というような個別の前向きな気持ちの創造、そういうことを目標にしているような気がします。…経験が追いつかないというのは、常に起きることで、それでも人は、考えの枠を超えた部分を知ったときにものすごく驚いたり、現実が解けた気持ちになったりして、それを説明できるだけでも楽しいことです。…小さな喜びをたくさん顕在させて、思想・考えとしてはどこまでも行くことができる。だけども帰り道を考えなければならない。考えたことがどこに辿り着くのかというと、やはり自分の足元です。そこに戻ってくる。そのプロセスが…本物ぶりを証明しているということになる。」［２］

その「難しい内容」を自分たちが前向きに生きていく気持ちにつながるように理解させる。どこかの誰かのモノローグではなく、「私達のことば」として引き受けさせる。そう願い、教材のことばは必ず自分たちに向けられている、という前提で教室を設定することが、つながりを発見する一針の穴を穿つ。「私たち」で考えることは、その穴からことばが流れ出すための必須条件であることが改めて確認できます。〈私〉とテキストから出発し、「私たち」を経て、考えは再び〈私〉に還ってくる。この往還のイメージは、授業設計のヒントとして取り出せると思います。往還はらせん状に継続する。

ここには価値の学びがあります。ことばの理解と表現のためには、自分（たち）の身体に突き刺さる価値のくさびが打ち込まれていなければならない。このことを「私達」ははっきり教えてくれます。ことばの学びは、右のものを左とつなぐような〈水平〉処理にとどまるものではない。それは、ＡＩにもできる。しかし、ＡＩに絶対にできないのは、「自分の足元」「自分の身体に沸き立つもの」を自分のことばで確かなものにする〈垂直〉の思考です。

次は、再び卒業生のことばから。

（認識と行動）

…不条理を感じることが多くあり、無力さを感じることも多い現場だと思います。そうした現場で仕事を続けていくために必要なことは、理不尽がどのようにして生じているのかを知ろうとすることだと思いますし、またそうした状況の中で自分が何をするべきか考えて決めることだと思います。自分の立っている場所がどのように成り立っているのかを知り、またその場所で自分に何ができるか、どうするかを考え決めるという姿勢を獲得することができたのは、「私達」での体験が大きいのではないか…。［１］

「理不尽がどのように生じているのかを知ろう」という態度は、高校生のとき、「経験が追いつかない」複雑で不可解なテキストに立ち向かった経験に由来するのではないか。「その場所で自分に何ができるか」と考える姿勢は、国語教室で自分が解いた理解をみんなに伝えることばを探し、伝えようとした経験が種となり、育ったものではないか。「私達」を振り返ってください、といわれたとき、今自分が立っている場所をめぐって、このようなことばが浮かんできたということを教育の成果とみなすことに不都合はないと思われます。

この第一弾での協議ではさらに「テキスト解釈の自由度・深め方」「テキストの〈古典化〉」といった本質的な課題にも触れましたが、別の機会に譲りたいと思います。また、研究会の第二弾では、金城宗幸氏（『ブルーロック』などの漫画原作者。「私達」の卒業生）、石井英真氏（京都大学・教育方法学）、山元隆春氏（広島大学・国語教育学）がそれぞれの立場から「私達」をめぐるトークを展開し、その後フロアを交えた協議も行われました。今回示した第一弾での観点が引き継がれた形で議論されました。今宮高校のホームページなどで公開されることと思います。

特にこれからの国語教室を担っていく人たちに、「深く広い視野」と「実証された具体的な方法」を獲得するために参照してほしいと思っています。

［１］小山秀樹（2025）、『「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル―「受講生の声」編―』、2025 年 1 月 25 日、大阪府立今宮高等学校
※デジタルブック版、PDF 版も大阪府立今宮高等学校ＨＰ（https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/）で公開されている。
［２］小山秀樹（2025）、『「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル―「私達まつり」授業・研究協議編（2024.11.15）』、2025 年 1 月 25 日、大阪府立今宮高等学校
［３］「私達まつり第１弾（令和 6 年 11 月 15 日（金））ダイジェスト動画（卒業生による授業・研究協議）」、大阪府立今宮高等学校ＨＰ（https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/）、2025 年 2 月 20 日参照
［４］桝井英人（2019）、「新しい国語教育への息吹」、『教職支援センター年報 2018』、No.10、21-25 頁
［５］桝井英人（2023）、「根源的な自発性を自発的に涵養する―国語科教育法という場」、『教職支援センター年報 2022』、No.14、44-49 頁

6 関連資料・関連項目リンク(QR コード・URL)

6-① 小山秀樹 研究論文・実践報告

・「ことばで生活は切り開かれたか ： 学校設定科目「私達が立っている場所」十年の検証(2011)」 https://hiroshima.repo.nii.ac.jp/records/2020730
・「私達がつくっていく場所 ： 「十六歳からの発信」を開く(2002)」 https://hiroshima.repo.nii.ac.jp/records/2020646
・私達が立っている場所 ： 一九九七年七月、「トルソーの時代」を読む(1998) https://hiroshima.repo.nii.ac.jp/records/2020572
・「私達が帰っていく場所 ： 「トルソーの時代」・「浅茅が宿」・地域の古典を読む(1997)」 https://hiroshima.repo.nii.ac.jp/records/2020547
・「生徒の活動を中心にした授業展開の試み ： グループ発表で「こころ」「羅生門」を読む(1992)」 https://hiroshima.repo.nii.ac.jp/records/2020466
・「現代詩における〈共同性〉の探求 ： 谷川俊太郎のばあい(1989)」 https://hiroshima.repo.nii.ac.jp/records/2020421

小山秀樹　学術成果物(広島大学　学術情報リポジトリ)

https://hiroshima.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=-createdate&search_type=1&q=%E5%9B%BD%E8%AA%9E%E6%95%99%E8%82%B2%E7%A0%94%E7%A9%B6%E3%80%80%E5%B0%8F%E5%B1%B1%E3%80%80%E7%A7%80%E6%A8%B9

6-②　「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル

Ⅰ―「受講生の声」編―

デジタルブック版	PDF ダウンロード版
https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/18503/	https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe.pdf

Ⅱ―「私達まつり」授業・研究協議編―　2024.11.15

デジタルブック版	PDF ダウンロード版
https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/19751	https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe2.pdf

ダイジェスト動画	
「私達まつり」第１弾卒業生による授業	「私達まつり」第１弾　研究協議ダイジェスト版
https://www.youtube.com/watch?v=fq679m-PvG0	https://www.youtube.com/watch?v=t7tG0sualzI

Ⅲ―「私達まつり」ｽﾍﾟｼｬﾙﾄｰｸ・ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ編 ― 2025.1.25

デジタルブック版	PDF ダウンロード版
https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/22566	https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe3.pdf

ダイジェスト動画	
「私達まつり」第２弾　スペシャルトーク	「私達まつり」第２弾　ディスカッション
https://youtu.be/7uTUEMgnA0o?feature=shared	https://youtu.be/WYMCq0ztcy8?feature=shared

6-③　桝井英人(関西大学非常勤講師) 実践報告

国語教室の本質――「私達が立っている場所」を参考に

(関西大学 教育支援センター年報 2024　所収)

https://www.kansai-u.ac.jp/kyoshoku/statistics/assets/index/report/2024/2024_masui.pdf

〈 私達が立っている場所 〉

私達まつり
2024

To be continued.....

（さらに番組は続きます....）